
片思いのキューピット

粗茶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

片思いのキューピット

【Nコード】

N2314L

【作者名】

粗茶

【あらすじ】

片思いの女の子が、健気(?)に好きな人の恋路を応援するお話です。多分。

(1)

私は好きな人を見ていた。

でもその好きな人はずっと他の人を見ていた。

「深山と風見、ゴミを焼却炉に持って行ってくれ」
担任が私、みやまろかけ深山千景とかざみまもる風見衛君を指名した。

風見君と二人つきりになれるッ！

ああ、担任ありがとう！

今ならその薄くなってきた頭も、後光が差して見えるよー！

風見君は、私が入学したばかりの時に一目惚れした人。

3年3学期の1月になった今でも、好きな気持ちは変わらない。
むしろ、3年間クラスが一緒でどんどん好きになってる気がする。

声を聞けば胸がきゅううんと切なくなり、姿が目に入れば乙女モードになって心臓がこれでもかと高鳴りする。

178cmの長身、成績抜群で指定校推薦で有名大学にも合格済み。
ルックスも良くモテルんだけど、浮いた噂が全くない硬派な奴。
浮いた噂が無いのは、私の推測だとある理由があるんだけど…。

私が幸せにひたつてると、

「一人でいいよ」

風見君が、両手それぞれにゴミ箱をひょいと抱えてスタスタ教室

「大丈夫か？」

「うん…ありがとう」

「いいさ」

風見君はホッとしたりのように、やんわり笑って腕を放した。

そうして黙々と散らばったゴミをかき集める。

咄嗟にゴミ箱を放り出してでも、助けてくれたのだ。

風見君の優しさがじんわり沁みてくる。

私は泣きそうになるのをグッとこらえて、立ちすくして彼を見つめてしまっていた。

優しい。

この人は本当に優しい…。

3年前からずっとそう。

ルックスより、頭の良さより、何よりも、この人の優しさに惚れたのだ。

……だから。

自分の為？

風見君との時間が欲しかったから？

分からない、でも一番は彼の優しさに恩返しをしたかったから。それだけは間違いない。

……だから言ったのだ。

「風見君、河村由香のこと好きなんでしょ？」

「！」
風見君がハツとした顔で目を見開いてこちらを向く。

今日だけでなく、3年同じクラスで過ごしてきて、初めて私の方をちゃんと見てくれた気がする。

なんて憎らしい奴…。

でも大好きな奴なんだよね、だから余計憎らしい。

「由佳は私のイトコなの。協力しようか？」

(2)

私は風見君をずっと見てた。

そうしていたから彼がずっと誰かを意識して、目線を送っていたのが分かる。

その誰かとは、私のイトコの、河村由佳だった。

だからモテるだろう彼に、高校に入って全く彼女が出来なかったのだと私は思う。

河村由佳は私のいとこで、私や風見君の3年2組の、隣のクラスの3年1組。

1、2年の時は同じクラスだった。

真っ白の肌に桃色のほっぺ、可愛い童顔の顔立ち、絹のようなサラサラの肩までの髪。

同性の私でも思わず抱きしめたくなる、まるで子猫のような女の子なのだ。

性格もほんわかしていて、癒し系の愛されキャラ。

私が勝てるわけないし、勝とうとも思わない。はなから白旗だ。

「ちーちゃん、クレープ食べに行くんだけど一緒に行かない？」

風見君とゴミ捨てから帰って来ると、帰り支度を済ませ友達を連れて由佳が廊下において誘ってきた。

ふわふわして、やっぱり今日も可愛い。

「ちよつと約束あるから今日は行けないや、由佳ごめんね」

いいよ、と由佳は手を振って去っていく。

横に居る風見君を見やると、顔を赤く染めて由佳を熱く見つめてい

た。

ハハハ、分かりやすい奴め！

ぼーっとしている風見君をツンツンつつく。

「今日は作戦会議の予定だったけど、今度にして由佳とクレープ食べに行くのもいいね、どする？」

「いつ、いやいいよ。河村さんとデートだなんてそんな僕……」

風見君が茹でダコみたいになってて、顔をぶんぶん横に振る。

デートじゃないし！

キャラ変わっちゃってるよ！！ しかも一人称僕とか…。

由佳の可愛さは、硬派な風見君をこうまで変化させるのか。おそろべし。

ヤキモチで胸が痛くなるけれど、由佳相手なら仕方ない、とさえ思っってしまう。

加えて、こんな風見君も可愛いなあと感じる救いよりの無い私なのだった。

掃除が終わって放課後、私と風見君は二人教室に残っていた。

「作戦の流れとしては…何とか仲良くなって、バレンタインにチョコを貰う！これが第一の目標ね。最終目標は3月1日の卒業式で告白すること。でもその先にホワイトデーもあるし、お返しと共に告白でもいいわね。うまくいかなくても共同戦線はホワイトデーまで。それまでは出来る限り協力するわ。分かった？」

「…チヨコ…河村さんからのチヨコ……」

風見君は、どうも由佳のこととなると、たまに人格変化スイッチが入るようだ。

とりあえずスルーして続けることにする。

「出来る限り、仲良く出来る機会を作るから。ね？ やって見ない？」

今度は何やら考え込んで難しい顔をする風見君が。
どんな表情の風見君もかつこええのう…。

「いくつか聞きたいことが。最初に確認しとかなきゃだけど、今は河村さんに彼氏はいないの？」

「いないわ」

風見君が表情が少し柔らかくなった。そりゃ由佳に彼氏がいたらこんなことはしない。

「好きな人もいないの？」

「それは知らない」

とたんに表情が曇る。分かりやすい奴め。

「私が聞いたら教えてくれるかもしれないけど、それを流石に風見君にバラすのは出来ないよ。風見君を全面協力するけど、由佳を裏切るようなことは私はしたくないから」

「ああ、そうだな」

「風見君が由佳好みの男になって振り向かせるの！ 卒業まであと少し、駄目元でやってみない？」

「お、おす。元々諦めてたし、卒業まで頑張ってみる。協力頼む。でも…」

「何故深山さんが、ここまでしてくれるんだ？」
う…。

それは…あなたが好きだからです！

あなたとの思い出が欲しいからです！

何より、あなたの優しさに恩返ししたいからです！！
言えないよー！

「ええと…、受験もうすぐだし勉強教えて貰えたら…いいかなって」
「…分かった。そういうことなら全力で協力させてもらうよ」
私グツジョブ！

ナイス言い訳に自画自賛したが、彼の優しさにつけこむような理由にちょっと心が痛む。
しかし、悲しいかな成績が悪くて協力が欲しいのは本当なのであった…。

「あともう一つ教えて。何故俺が河村さんを好きなこと知ってんだ？俺、誰にも言ったこと無い」
ううう…。

訝しげな視線が注がれる。言葉に詰まった。
あなたが好きで、ずっとあなたを見てたから分かるんです、とは口が裂けても言えない。

「えっと、私そういうのに敏感だから、なんとなく　く分かつちやつたのよー！」

「そっか…。無意識に河村さんのこと、いつも見てたからなあ」
そうそう、そうなのよ。

それを私がどんな思いで見っていたか。罪作りな奴！！

(3)

次の日、風見君に渡したいものがあって、学校が終わってからファミレスに来て貰った。

別にファミレスで無くてもいいんだけど、風見君と一緒にファミレスで食事をしたい！ という私のささやかな野望の為なのでした。役得役得。むふふふ…。

「これと、これと、あとこのストロベリーパフェお願いします」

「俺は半熟卵付きカルボナーラで」

注文を取った店員が去っていくと、風見君に小声で言われる。

「深山さん…太るぞ」

「私は痩せの大食いなの」

「痩せ？ 誰が？」

私はメニューを縦にして、失礼極まりない男の頭をバシッと叩いてやった。

「おごろうと思ったけど、深山さんがそんなことするならやめた」
こやつめ……！

好きな人を目の前にしたら少食であるべきかなあ、とちよつと反省でもいいや。どうせ私に気持ちが悪くことは無いしね。

だからだと思っけど、風見君と居て胸はキュンとなるものの、緊張はしなくて素の自分を出せる。

身近な感じさえして、こういうのも悪くないと思う。

「ほんとに全部食べやがった…」

「ふふふ。食べ物を残すと勿体ないお化けが出るんだから」
「お化け??」

不思議な顔をする風見君をスルーして、本題を切り出した。

「風見君は今週土曜の放課後、空いてるかな?」

「何も予定は無いけど。勉強の件?」

「良かった。勉強は来週からでいいよ。でね、土曜由佳と友達とカラオケに行くんだけど、風見君も行かない?」

「……河村さんとカラオケ……河村さんと暗い密室に一緒……行くッ!」

なんか危ないよ風見君……! 変な人になってきてるよ……!!
元からこんな性格だったのか!?

ずっと見つめてきた隠れストーカーとしてちよつと自信無くなってきた……。

「風見君、『タルタルズ』ってバンド知ってる?」

「あんまり。曲を何度か聞いたことある程度かなあ」

「由佳の好きなバンドなの。特にボーカルが好きらしいよ」

私も結構好きで、由佳と一緒にコンサートも行ったことがある。

靴の中からCDを数枚出し、風見君に差し出した。

「『タルタルズ』のCD。貸してあげるから土曜までにマスターして来てね」

「ええッ!? 土曜に俺がこれを歌うの?」

「そうよ。由佳へのアピールなんだから頑張つて。めぼしい曲をリストアップしてこのメモに書いてあるから参考にしてね。よし、練習がてらカラオケ行くよー!」

「風見君、下手~~~~~!!!!!!」

「だから…、何度か聞いたことある程度なんだって。急に歌えない
つつの!」

「もう! 見本見せるから聴いててね」

「うめえ…」

「上手くないよ。つて、なに勝手に曲入れてるの〜!」

「…小倉圭」

「あー、私も好きだよ。ギャラクシーヒーロー伝説ってアニメの、
エンディング曲がきっかけでハマった。風見君、渋いの好きなんだ
ねえ」

「マジカツ!! 俺その作品めっちゃ好きなんだけど」
風見君がキラキラした目で私を見てくる。

硬派な朴念仁が、意外とアニメ好きとか、私のツボをつかないで!
その後は、結局ギャラクシーヒーロー伝説の曲ばかり歌うことにな
ってしまつて…。

「また二人でカラオケ来ような!」

「うひゃッ!」

私の手を取り言う始末。

手がああ、手が触れてる!!! ななな何という卑怯な不意打ち!!!
しかも少し汗ばんで、生々しいよ! ひえええ…

頭がとろけそうになるけど、断腸の思いで風見君の手を振り払った。

「風見君、当初の目的忘れて無い!? 土曜のカラオケで上手くや
つて、由佳に印象付けなきゃなんだよ!」

キツと睨んで、言い聞かせるように言う。

「ああ、家でちゃんと練習してくるから。さ、深山さん、次は1期のオープニングいこうぜ」

おいしい…。こやつめ、ちゃんと聞いてますかー！

(3) (後書き)

なんたるタルタル

カラオケボックスから外に出ると、綿みtainな小雪が舞っていた。

「さぶう…」

「これやるよ」

風見君がポケットからカイロを出して、私の手に持たせてくれた。
あったかい。

風見君は自転車通学らしく、自転車を私の前に乗り付けてきて、後ろに乗るよう促される。

「暗いし送るよ。来週から勉強教えに行くから家知つとかなきゃだし」

「まだ7時だし大丈夫だよ、ここから近いし。家は学校で地図渡すよ」

「遠慮すんな、ほら乗って」

2人乗りなんて恥ずかしくて無理い！

結局、風見君が自転車を押して家まで送ってくれることになった。時間が余計かかって申し訳ない気がする。

でも、2人乗りは流石に刺激が強すぎて無理なんだ…すまぬう、風見君。

隣を見上げると、ふわふわ舞い降りる雪の向こうに、白い息を吐く端正な横顔が見える。

非日常的な光景にくらくらする。

本来横に居るべきなのは、私じゃないのになあ。

でも、今は仮初めの夢心地に身を委ねよう。

「あ、そだ、携帯番号とメルアド交換しとかね？」
「うん」

実は何度も聞こうと思ったものの、結局聞けずじまいなのだった。

「深山さんは、好きな人はいないの？」

「……いるよ」

突然何を言い出すんだ、こやつは。

「知ってる奴なら協力するけど？」

「いいよ」

知ってるも何もあなたです！

「俺には駄目元で頑張れって言ったじゃん」

「うん…、そだね。でも私はいいいよ」

笑って誤魔化すしかなかった。

途中、由佳の家の前を通った。

大きな洋風の一軒家。

電気が煌々(こうこう)として、家族の団らんの気配がする。

ああ、ここにはすべてが揃っているなあ、と思う。

だから愛されるべくして愛される、風見君が由佳を好きになるのも、正しいことのように思える。

私の住んでるアパートに着く。

部屋には誰もいない。真っ暗だ。

まあ、馬鹿兄がもうすぐ帰ってくるんだけど。

「私、ここの2階の向こうの端に住んでるの」

「ここか。じゃあまた。勉強頑張れな」

「送ってくれてありがとう、またね」

その夜、風見君が知ったらドン引きするだろうなと自嘲しつつカイ
口を抱いて眠った。

あつたかい。

彼の優しさのぬくもり。

効果時間は切れかかってたけれど、私には例えようもなく、あたた
かく感じた。

土曜日のカラオケは、ファーストフード店に集合だった。

店のガラス窓越しに、楽しげに向かい合う風見君と由佳が見える。私服の彼を見るのは初めてだった。

黒を基調にシックにまとめている。彼らしいなあと思った。

顔を赤くして、ニコニコ笑いながら由佳に語りかける風見君。うんうん、と可愛い笑みを返す美穂。

何だか…かなり良い雰囲気!?

ぐ、ぐふう……。

実際目の当たりにすると想像以上にキツイ。

今さらだが、私のやってること、風見君を応援するということは、こういうことなんだ。

胸がきりきり痛い。

息苦しささえ感じて、身体から変な汗が出てくる。

頑張れ自分! 風見君の幸せを受け入れないと…。

私は意を決して店に入った。

「ちゅちゃん聞いて! 風見君『タルタルズ』好きなんだって。結成当時のこととか、すごく詳しいの〜」

「へえ、由佳と趣味合うね」

さすが優等生。下調べはバッチリか!

「あ…」

風見君の前の、未開封のチーズバーガーを取ってやった。

「風見君なあに？」

「いえ、何でもございません……」

「風見君が来るなんてびっくりしたよ。ちーちゃんと仲良いんだね」

「うんにゃ、別に良くない。勉強教えて貰ってるだけだよ。」

まだ何も教えて貰って無い。

でも誤解を与えぬよう、ここはちゃんと否定しておかねばならぬ。

「あと来るのは美穂？」

「美穂ちゃんと、沢木君。沢木君と話すの初めてなの。緊張するよ」

美穂は由佳と同じクラスの女の子で、たまに今日みたいに私も一緒に遊ぶ。

サバサバとして男勝り、言動はきついけど情がこまやかで、とても周りに気を配る子だ。

大学生の彼氏がいるらしい。

沢木は……あの沢木……？

「お待たせー、沢木が逆ナンされててさ」

「こんにちは、遅れてごめんね」

店に入ってきた美穂の隣に、超絶イケメンがいた。

やっぱりそうだ、沢木智也！

185cmの長身、軽くウェーブのかかった長めの髪がふわふわ揺れている。

ドイツ人のハーフだからで、色が全体的に薄い。

家は資産家で、成績もトップクラス、スポーツ抜群。

いつも爽やかな笑みを浮かべて、フェロモンをまき散らす。

風見君と同じくらい、いやそれ以上の超ハイスペック男じゃないか。

もちろん私は断然、風見君だけどな！

噂では、次々と女をとっかえひっかえしているらしい。

しかも相当なレベルの人でないと付き合えないとか。

何故そんな彼が、私たちとカラオケ？

その疑問は、すぐに解けるのだった。

そうしてカラオケボックス。

風見君が『タルタルズ』の曲を、見事に歌い上げた。

練習したんだなあ。

息子の成長を喜ぶ、母親のような心境になってしまう。

「わあ、風見君上手いね〜！」

「あ、ありがとう…」

喜ぶ由佳の隣で、風見君が真っ赤になって照れている。

それを見た美穂が苦笑して、ぼそっと漏らした。

「分かりやす……」

「やっぱり分かるよね……」

私も苦笑いを浮かべるしかなかった。

「あいつもなのよ」と美穂が沢木君にそっと顔を向けた。

「へ？」
ま、まさか…………。

続いて沢木君も、風見君が歌ったのとは違う『タルタルズ』の曲を披露した。

なぜこいつも『タルタルズ』なんだ？

それはさておき、上手い。

風見君も上手かったけれど更に上手い。

透き通った美声が心地よく耳に残る。

容姿も相まって、まるでテレビで芸能人を見てるかのような錯覚を起こしてしまう。

何なのお、この何でも出来る超絶イケメンは…。

そして、歌い終わった後、沢木君はさらりと言ったのけたのだ。

「河村さん、良かったらさあ、僕と付き合わない？」

…………。

…………。

…………。

……………?!

柔らかく微笑んだままの沢木君。

由佳を含めて、あまりの急な出来事に周りには凍りついた。

何故そのタイミング？ 何故ここで?!

口をぱくぱくするだけで、驚きのあまり声が出てこない。
しばらく、いや途方もない沈黙が続いた気がする。

その沈黙を破ったのは風見君だった。

「いや、俺と付き合おう。河村さん、俺と付き合ってください」

風見君、言っちゃったよ！

卒業式に告白するのが目標だったのに…。

諸々すつ飛ばして、告白しちゃった！ うひゃああ。
なんとというサプライズ。

まさか今日に、好きな人の告白を目撃することになるうとは。
上手くいつて欲しいような、いつて欲しくないような……。
応援しないといけないのに、本音ではやっぱり複雑。

由佳はどう応えるんだろう…。

茫然自失して凍りついたままだ。

そりゃそうだよね、まさかカラオケしてて告白されるとは思わないよ。

それも二人に。

見てる方も驚きで声が出ないんだから、当事者の由佳はもっとだろう。

一方、沢木君はニコニコした笑顔を崩さない。

この状況を楽しんでるようにも見える。

何なんだ、この余裕たっぷりのイケメンは。

そもそもおまえが元凶なんだー！

「あーあ。由佳が困って固まっちゃってるよ。二人とも由佳を困らすのは本意じゃないでしょ？ 返事はしばらく待つてあげなよ。じやあフェアに、ってことで、沢木も風見も由佳と連絡先交換してもらいな」

結局、美穂がその場を仕切り、カラオケは解散になった。

週開けて月曜日、風見君が私の住むアパートに来ている。平日、学校が終わってから、私の家庭教師をしてくれることになったのだ。

好きな人とふたりつきり！

恋愛小説だったら、何かが起こるべくして起こる絶好のシチュエーション！！

今夜何かが起こる！……………わけはないのであった。

夕食の下ごしらえを済ませて私の部屋に行くと、風見君がこたつテーブルに座って、ギャラクシーヒーロー伝説のDVDを見ていた。幸い、うちには外伝含めて全巻揃っているので、待つて貰う時に暇にさせないで済みそう。

いそいそと私もこたつに入る。

風見君と同じこたつに入れる幸せ。むふふ…

「待たせてごめんね。うち母親いなくてさ、私のご飯作らなきゃなんだ。良かったら風見君も一緒に食べて行きなよ」

「悪いよ」

「いいから、いいから」

強引に説得して、お家の方に夕食はいらないと連絡して貰った。

「由佳とはどうっ？」

「…………俺のことよく知らないので、友達からお願いします。ってメールがあつた。それだけ」

「そっかあ…。でも、はつきり断つて無いなら、沢木君とも付き合いわけじゃないんだろうし、いいんじゃない？　しかし…………ほんとにビックリしたよ……………」

「俺もビックリした。とつさに俺も告白しちまうし…もう春まで冬眠してたい気分だよ」

「気持ちを伝えられたのは良いことじゃん。ライバル牽制もできたんだし」

もし断られることになっても、好きな人に気持ちを伝えられたのは、素晴らしいことだと思う。

私みたいに、もうここまで乗りかかった船にどんぶらこしてると、告白も出来ないよ…くふう。

「ライバルが沢木君かあ…すごい対抗馬が出てきたねえ」

沢木君と、風見君。

どっちも学校でトップクラスのハイスペックだと思う。ただタイプは全く違う。

沢木君が優雅なアフガンハウンドなら、風見君は朴訥な秋田犬？　由佳はどっちを選ぶんだろう。

「沢木にかなうわけねえ」

「そんなこと無い無い！　私は断然風見君の方がいいと思うよ。自信持ちなってる」

「お…おう」

「ただ、沢木君の方が女性経験が豊富そうだね。風見君は由佳一筋だったから、全く経験無さそう。その点がちょっと不利かなあ」

「う、当たってる」

「のんびりしてたら、あつという間に沢木君に由佳を取られちゃうよ。だから私の家庭教師はいつでも休んでいいからさ、由佳はもう専門学校に入学が決まってるし、積極的に由佳を誘うんだよ。あんな女たらしに由佳を渡すのは心配だもの、頑張ってる」

「いや、家庭教師はきつちりやらせてもらうよ。さ、これにまとめて来たから、明日までに覚えて。ひとつずつ理解できるまで見ていこうか」

差し出された紙を見ると、A3用紙にパソコンでびっしりまとめられている。

私の為にここまでやってくれるとは…。

風見君、ありがとう。

「ちなみに、毎日1枚な。ちゃんと覚えていけよ」

「うはあ……」

こたつテーブルの斜め向かいに座って、丁寧に教えてくれるんだけど…

近い、近いよー！

風見君の顔が近いよー！

息がふうつと顔にふきかかる。ひえええええええ！

ある意味天国だけど、ある意味拷問だ。

心拍数上昇、冷や汗をかきながらも何とか一通り教えて貰った。

はあはあ…耐えきった。ってどんな苦行やねん！

「深山さん、男に免疫無いんだなあ。顔まっかつか」

「ッ！」

「俺も人のことは言えないけど、俺以上なんじゃない？」

クスクス笑って、さもおかしそうに言う。

風見君だからなのよー！ 誰のせいだと思ってるんだあ！

「か、か、風見君が近すぎるの！！　　そういつ風見君こそ、由佳の前では顔まっかつかなんだから！」
「うえッ！まじか……」

本人に見せてやりたいよ、由佳の前での風見君のデレデレ顔を！！

「ちーちゃん、ただいまー！ お友達が来てるの？」

馬鹿兄が帰ってきたようだ。

風見君を連れてキッチンに行くと、馬鹿兄がシャツとトランクスの姿で居た。

「同級生の風見といます。お邪魔してます」

「まさか、ちーちゃんが男を連れてくるとは…お兄ちゃんショック

…」

「ももも、何て格好してるの！ 恥ずかしいし、風邪引くわよ！
ちゃんとしてよう」

今日はすき焼きにしたのでした。

同じ鍋をつつく私と風見君：間接キッス！ いや間接間接間接キッスくらい？

我ながら発想が超キモイが、ああ…幸せ。

馬鹿兄も一緒なんだけどな。

馬鹿兄のグラスにビールを注ぎながら、念のため言っておく。

「変な誤解しないであげてね、お兄ちゃん。風見君は由佳が好きなんだよ。私とはただの友達だから」

「ほほー？」

というか、由佳に告白までしてるし。

「ちよつと深山さん！」

「誤解されたらいけないから、ちゃんと言っておかないと」

「由佳ちゃんに惚れるのは男として分かるぞ！ 小動物みたいに可

愛くて、何かこう…男心をくすぐるよな。守ってあげなきゃって気持ちをかきたてるというか」

「このロリコン…由佳にそっくりチクっておくね」

「やめれーッ」

向かいを見ると、そうそう、そうなんだよね…と何度もつなずく風見君。こいつらめえ…。

「ちーちゃんはどつだ？ 性格はねじ曲がってるが、家事全般そつなくこなす良いお嫁さんになるぞー」

「はあ…」

「ちよつと風見君、あらかさまに嫌な顔しないでくれる?!」

「っ、っい…」

「君に肉はやらん！ 肉禁止！！ ちーちゃん見張つとけ」

「了解！」

「いいですよ、野菜好きですから」

「じゃあ野菜禁止だ！」

「なら肉を頂きます」

「うぬぬ…」

く、敵は手強し……。

「じゃあまた明日。」ちそうさまでした」

「また。気をつけて帰ってね」

リズムよく揺れる自転車が、冬の闇に遠ざかっていく。

アパートに戻ると、兄は上機嫌にまだビールを飲んでいた。

「いい奴じゃん。こつこつのも、賑やかでいいもんだな」

「うん」

「お兄ちゃんがお嫁さんを貰えば、いつも賑やかになるのになあ」
「げはっ…それを言うなよう、ふう」
むせ返る兄の背中をさすってやる。

「次はいつ来るんだ？風見君」

「明日。受験終わるまで平日は毎日来てくれるって」

「毎日?! 何でそこまでしてくれんの?」

「いい奴過ぎるのよ。私も申し訳ないから毎日じゃなくていいって
言っただけだね。受験まであとひと月しかないし、協力するから
には全力でやりたいらしくて、毎日来るって聞かないの」

「うーん…。何か下心があるとか? 男は狼なんだぞ。一応気をつ
けるよお、ちーちゃん」

「風見君に限ってそれは無い無い!」

何を言ってるんだ、馬鹿兄。

だから風見君は由佳が好きなんだよ。何も起こらないっつうの。

1週間経っても、もちろん何も起こらない。
でも、ひとつ変化があった。

「ちーちゃん、ごちそうさま。またね」

「また…:…ん? ツ!! ちょっと風見君! ちーち
やんて!」

「別にいいじゃんか。河村さんやお兄さんと一緒」

少し恥ずかしそうな笑顔を残して風見君は帰って行く。

そう、私への呼び名が変わっただけ。

ただそれだけなんだけど…、こ…こそばゆい…………。

日曜日、気持ちの良い快晴だった。

衣類とシーツを洗濯、布団を干して、部屋に掃除機をかける。

2DKなのでそれほど時間はかからない。

それからお風呂洗い。

泡立つスポンジを握る手をふと見ると、荒れてあかぎれのひびだらけだ。

家事をするくせに、手入れを怠っているから。

女を捨ててるなあど苦笑する。

インターホンが鳴って玄関扉が開く音が聞こえた。

「ちゅーちゃん ケーキ作ってきたの。一緒に食べよー」
由佳だ。

ちようどお茶をしたいと思っていたところなので嬉しい。

「いらっしやい。お風呂洗ったらすぐ行くから、コタツ入ってて。

スイッチ入れてねー」

シャワーで風呂釜を洗い流すと、念入りに手に保湿クリームを塗りつけた。

アッサム紅茶で淹れたミルクティーを飲んで、由佳がふっと息をつく。

「ちーちゃんの淹れるミルクティーはいつも美味しいね」

「やめてよ。誰が淹れても一緒よ」

ほんとうよ、と目を細めて彼女が微笑んだ。

簡素な部屋も心なしか華やかに感じる。

お腹に浸透するミルクティーのぬくもりのように、彼女と一緒に居ると心が休まる。

我がイトコながら、不思議な子だといつも思う。

ブルーベリーとサワークリームがたっぷり乗ったチーズケーキ。

「…うまあ……」

チーズケーキと、甘酸っぱいブルーベリー、ほのかな酸味のサワークリームとの組み合わせが絶妙だ。

「美味しいね！ こりゃプロ級だよ。叔父さんの店で出せるんじゃない？」

「まさか……。まだまだよお」

私の伯父にあたる由佳のお父さんは、飲食店を何店か経営されている。

製菓の専門学校を出て、そこでパティシエとして働くのが由佳の夢だ。

「貴史さんは？ まさかまだ寝てるなんてことは……」

「お兄ちゃんは、掃除の邪魔だから叩き起こしてやった！ ついでに買い物も命じて追い出した！」

「もう、相変わらず暴君なんだから。ふふっ」

「沢木君とはどんな感じ？」

気になっていたことを聞いてみる。

困ったような表情が返ってきた。

「うーん。沢木君とはあれから何にもないよ。あの人はよく分からない人だよ」

よく分からない人。

私もそうだ。

先日、沢木君について、彼と親しい美穂に聞いてみた。

『そうだよな、うん、ごめんな。由佳のこと心配してるんだよね』
美穂はさも私の考えてることが解る、と言いたげだ。

『あいつは…悪い奴じゃない。確かに遊んでる。でも遊びと本気の区別はちゃんとする奴だよ。DSで人を食った態度だから、誤解されがちだけどね』

うーん…。

確かに遊んでて、DSで人を食った態度。

それに、遊びと本気の区別って？

セフレと彼女ってこと？

美穂は信頼してる。

でも悪い奴じゃない、とはとても思えない。

私的にはどんな鬼畜な遊び人なんだ、って感じなんです？！

「風見君とはね、昨日出かけて来たよ」

「……………」

不意打ちに、言葉が詰まってしまった。

胸の内の色んな感情をぐつと飲み込む。

「そっかあ」と精一杯の笑顔で言う。

ふう、言えた。

ちよつと顔はひきつってたけどきつと大丈夫。

「これ、おみあげ」。受験頑張ってたね
学業のお守りだった。

二人で神社に行ったのか。

何だかとても、二人らしいなあと思った。

次の日、夕食後に風間君から同じお守りを貰った。

由佳に貰ったものと同じだと伝えると、「あー」と声を上げる。

「河村さん同じの買った。ちーちゃんにだったのか」

「効果2倍だよ。ありがたく貰うね」

「俺のちーちゃんは愛されてるなあ。うんうん」

馬鹿兄がニヤニヤして嬉しそうにする。キモイ。

「俺の、とか言うな。気持ち悪い」

「きもちわるい…ひどい…ひどいよー」

25の男が泣き真似をするな。キモイ。

「そういえば河村さん、貴史さんのこと言っていましたよ」

「お？ カッコよくって頼りがいがあるって？ 参ったな！。困っちゃうな」

「いえ、すごく面白い人よね」と

「……それだけ？」

はい、と頷く風見君。

兄が「はあ……」と頭を抱え始める。

「いつもそうなんだよね、面白い人止まり。世の女の子は見る目ないよね。何故こんなイイ男を放って置くのか常々不思議でたまらんちん」

「見る目あるから、放って置かれてるとか」

「…風見君、それどういう意味？」

「風見君、正解」

「ちーちゃん、そこは兄を庇うべきでしょ。6年ふたりで暮らした仲じゃないか」

そこで会話が止まってしまった。
兄が、しまった、という顔をする。
我が家でタブーとなっていて、親のことが連想されてしまったから、親のことについては心のどこかにわだかまりがあつて、私も兄もなかなか話が出来ない。

「ぶしつけなんですが、ご両親は？」

遠慮がちに風見君が聞いてきた。

「…両親は6年前に別れて、それぞれ新しい家庭持つてるの。私たちはいらない子ってわけ」

「こらこら。違うよ」

兄が身を乗り出して、頭を優しくいたわるようになってくれる。

「でも、もう慣れたから全然平気。私にはお兄ちゃんがいるし。ただお兄ちゃん、私がいるから恋人も作らないで独りなんじゃないかって。それだけが心配」

「そうなんだよね！。引く手あまたなのを、片っぱしから断り倒して。全く罪な男だわ。そのうち刺されちゃうかも。あ、生命保険入っておかなきゃー」
なでていた手で、ぼんぼんと頭を叩かれる。

「嘘嘘、ぶつちやけ全くモテナイだけだから気にするなよ。な」

「うん、そうだと思った」

「なんだとお」

この兄の底なしの明るさとバイタリテイに、ずっと救われてきた。
本当に兄には頭が上がらない。

「親のことって難しいですよね。子は鎡かすがいと言いますが、子供には親のことはどうにも出来ない」

「んだなあ……難しいな」

風見君にも、何か心を痛めることがあるのだろう。

彼女としては無理だけど、友人として力になりたいと思う。

「ちーちゃん、俺のこと兄だと思っていつでも頼ってくれな、兄だと思って何でも言っちゃって」

ことさらに兄を強調して、兄をけしかける様子が可笑しい。

照れ隠しに、そんなふうにする感じがした。

「あのおう…目の前に本物の兄がいるんですが…」

「えっ、あっ、そうでしたっけ？ 忘れてました」

「風見君の方がお兄ちゃんぽいかも」

「でしょー」

兄の座が危ないー！とわめく兄を、ふたりで笑い合った。

帰り際、風見君が心配そうな表情で覗き込んでくる。

大丈夫だよ、ありがとう、という気持ちを込めて微笑むと、一度うなずき微笑み返してくれた。

風見君には随分甘えてしまったと思う。

元々は、風見君の助けになりたいと思って始まった仲なのに、これ以上甘えてはいけない。

受験が終わったら、距離を取ろう。

昼休み、学校の廊下で思わぬ人に声をかけられた。

「やあ、河村さんのイトコさん」

「……………」

沢木智也だ。

廊下の窓にもたれながら、今日もゆらゆらととびきりの笑顔を浮かべている。

「まさか声をかけられるなんて。びっくり」

「イトコさんはそりゃあ、将来の僕のご親戚かもしれませんから」

「でも私の名前覚えてないんですよ」

「……………ミヤマラさん？」

おのれ…。

やっぱりこいつは好きになれない！

「深い山と書いて、ミヤマです」

「これは失礼。興味の無いことは覚えが悪くて」

悪びれる様子も無く、スラリと長い腕でお手上げのジェスチャーをしてくる。

む…むきい！

「由佳のことは諦めたの？ そうしてくれると嬉しいんだけど」

「どして？ 諦めて無いよ。さすがに僕も受験前だからねえ。今は自重して勉強第一さあ。あのクソ真面目な風見だと急ぐことも無い

し」

「そうかしら？」

「いやあ、負けないね。付き合っても奪い取る自信あるね」
自信たつぷりに、余裕の笑みを見せる。

どこから来るんだ、この自信は。

私だったら一万回口説かれてもなびかぬう。

「沢木君みたいな遊び人に、風見君が負けるわけないわ」

「遊び人？ 僕は高校入ってから二人しか付き合ったことないよ。
遊び人は心外だなあ」

フリーの時はそれなりに遊ぶけどね。と続けて笑う。

その遊ぶというのは、どういうことか具体的に聞きたい気もしたけど、とりあえず飲み込んだ。

「河村さんだつてそれくらいのお付き合いはあるでしょう。イトコさんだつてあるんじゃない？」

由佳は確かにある。

私は全く無いけど。恥ずかしやら悔しいやらで言わないでおく。

「とにかく、風見君は真面目ですごく優しい人なのよ、沢木君には絶対負けない！」

「何でそんなにムキになるわけ？」

白い手を口元に当てて、訝しげにじろじろ見てくる。

「んー。今の言葉、すごい気持ち入ってたよう？」

琥珀の瞳が、心を見透かすように見下ろしてくる。

やばい…逃げないと。

直感でそう思った時。

「好きなんだ？」
「！」

……うっ…逃げ遅れた…。

「そんなんでしょう」

「………ち、違うわ」

「えーっと。風見が好きだけど、風見が河村さんとくっつくのを応援してるってことが」

「………」

私の腕を取って、どこかへ連れて行くこととする。

「何だか面白そう　ねえ、ちょっと屋上で話そうか」

「えっ、やめてよ。離して！」

「河村さんに伝えようか？　大事なイトコの為に風見は候補から外れるかもね。ライバル減って僕はラッキー？」

「うっ………」

屋上に行く途中で何人もの生徒にじろじろ見られた。

特に女生徒の視線が痛い。

そりゃそうだ。超絶イケメンが私なんかの手を引いたら、何事だと思っただろう。

うっ…、変な誤解はされませんように。

「ちーちゃん？ 沢木？ 何やってんの？」

風見君だ。助けておくれ…

「風見君、たす…」

「風見に言っちゃってもいいのかなあ？」

「うぐ………」

「この子、ちよつと借りるねえ」

ひらひらと沢木君が風見君に手を振った。

目の前にいる沢木君に追いつめられるように、屋上のシャイングレ
ーの柵に背をつけた。

何かの力が宿ってるかのような琥珀の瞳に捕まって、観念して全て
を吐露してしまった。

話が終わると、何を考えてるか掴み切れない普段の笑顔が、とたん
に侮蔑の表情に変わり私に刺さってくる。

「ばつかじゃないの？」

「……………」

「そんな自分の気持ちを裏切るようなこととしてどうすんのさ。何が
応援だよ。心の底では二人に付き合っただけ欲しくないんじゃない？」

「……………でも風見君が由佳を好きなんだもの」

「関係無い。振り向かせればいいじゃん」

さも簡単そうに言う。

そんなことが出来るならとつくにやってる。

「風見と河村さんが付き合ったらどうせ君は泣くんでしょう？ど
うせ泣くなら気持ちをぶつけて玉砕して泣いた方がずっといい」

「……………無理……………」

「簡単さ。好きです、って言えばいいんだ」

またそんな簡単に言う……………。

でも、彼の言うことは正論だ。私が卑怯で臆病なだけ。

由佳のことと優しさにつけこんで側に居て。自己満足で喜んで。
間違ってるのは私だ。

「そうね。分かってる。分かってるんだけどね…」

視界がぼやけて、目から涙があふれてくる。

泣いたのは、高校に入ってから初めての気がする。

初めて気持ちを誰かに打ち明けたこと、凶星をつかれたことで、ずっと抑え込んでいた気持ちの堰が壊れてしまった。

「歪んでる。歪んだ愛し方だねえ」

小さなため息が落とされる。

「まあ…でも…そういうのも嫌いじゃないよ」

不意に横から肩を抱かれて驚いて顔を向けると、いつものゆらゆらした笑みが現れていた。

優しく抱き寄せて、そっとハンカチを手渡そうとしてくれる。

それは受け取らず、自分のポケットからハンカチを取り出した。

こういうことを簡単にするから、遊び人って言われるんだろう、沢木君は。

それから、予鈴が鳴るまで何も言わず静かに側に居てくれた。

「そろそろ戻ろっか。まー見ててみ？ 君の思惑通りにはさせないから」

「……どうして沢木君はそんなに自信满满的なのよ」

「僕ですから ソフフフ」

「意味分かんないわ、もう」

自然と笑みが漏れる。

この人は美穂の言うとおり、悪い人じゃない。

自信家で、正直で、見てて気持ち良いとさえ思う。

教室に戻ろうと立ち上がった時、屋上の扉が勢いよく開いて風見君が見えた。

驚いた表情をして、こちらに向かってくる。

「眼も顔も真っ赤で…泣いてたの!? 沢木! 何やったんだ」

風見君の後ろから由佳も現れて。

「沢木くん!!!! ちーちゃん泣かせるなんて、サイテ …!!」

屋上に怒声が響き渡った。

由佳が、まるで守ってくれるかのように私と沢木君の間に割り込んできた。

「もう！　ちーちゃんが沢木君に拉致されたって聞いたから、探したら案の定こんなことになってるじゃないの！　ちーちゃんに何したの！？」

「拉致つて…大げさだなあ」

「何したのって聞いてるでしょ！」

「ちよつとアドバイスしてただけさあ」

「アドバイスで何故泣くのよッ！」

そうだった…。

由佳は可愛らしい容姿と裏腹に、昔から一旦怒ると手がつけられない。

「ちーちゃんはね、一見しっかりしてるけど、アンタと違って繊細で傷つきやすいの！　デリカシーに欠けることぺらぺら言ったんでしょ！　謝んなさい！」

「ごめん？」

「全然気持ちが悪くもってないー！」

150?の小柄な由佳が、長身の沢木君を見上げて、すごい剣幕で圧倒している。

胸倉をつかむ…までは身長差で出来ないけれど、小さな手で沢木君のブレザーの襟をぎゅーっと引っ張っていた。

風見君は、目の前の光景が信じられないという顔で茫然としている。

「由佳……あはは」

「ちーちゃん？」由佳が振り返る。

「ご……ごめん。沢木君が由佳に叱られてるのがおかしくて……ふふふ……お腹痛い……あははは」

「ほんとおかしいね、僕も我ながら笑っちゃう」

不謹慎とは思いつつも、笑いが止まらなくてお腹を押さえてその場にうずくまってしまった。

沢木君もケラケラと弾けるように笑い出す。

「アンタは笑わなくていいの！」

「由佳、違うの。沢木君は何も悪くないよ。心配してくれてありがとうね。風見君もありがとう」

「あ、ああ……」

「それならいいんだけど。こんな男かばっても何もいいことないよ？」

本気で心配してくれているのが伝わってくる。

由佳は、他人からすると守ってあげたいと思われるタイプだけど、本人は決してそうじゃない。

強い子で、周りを守りたい、と自ら思うようなタイプだ。

親のことで悩んだいた時も、兄と同じようにずっと心配して気遣ってくれていた。

「ありがとう」と、もう一度由佳にお礼を言って軽く抱きしめた。

それで安心したのか、由佳も落ち着いたようだ。

「はあ〜 本性見せちゃった。これが原因で前彼に振られたんだよね。幻滅したでしょお〜」

「いやあ、いいと思うよ。僕的に最高。気の強い女を屈服させるの大好き」

「全力でお断りします〜」

「どうかな。人の気持ちなんて変わるもんさあ。変えてみせる」

「ハア？ このサイト 男は放っておいて校舎に戻る〜」

由佳が、私と風見君を引つ張って行く。

「ちーちゃんの受験が終わったら、遊びに行こうね。美穂ちゃんも誘ってさ〜」

「いいね。俺も行きたい」

「僕も僕も」

「沢木君は誘ってませんから〜」

風見君と私はぶつと吹き出してしまった。

「あーあ。お姫様を怒らせちゃったよ」

肩をすめて愚痴りながらも、相変わらず楽しそうだ。

教室に帰り際、沢木君が小声で私に何やらささやく。

「Ich liebe dich」

「何？」

「Ich liebe dich）イッヒ リーブ デイット（

ドイツ語のおまじない。風見に言ってみ？」「へえ。何のおまじない？」

彼はその問いには答えずに、手を振って自分の教室に向かって行った。

2月に入って学校は自主登校になった。

受験生の私は登校せず、家で勉強することにした。

朝食を作って兄を送り出して、もう少しだけ寝ようと布団に入る。うとうとと浅くまどろむのが心地良い。

しばらく経つとインターホンが鳴った。この時間に来るのは多分由佳だ。

渋々暖かな寢床を抜け出して、パジャマのまま眠気まなこで玄関の扉を開ける。

「おす」

私服の風見君がいた。

カーキ色のジャケットに、グレーのストライプのマフラーをしている。

私服姿を見るのは2度目だっけか。

「ちょっと…何でこんな朝早くに…」

「早くつてもう9時だよ。いつも通り起きたけど暇だったから家庭教師に来た。ハハ、思いつきり寝起きたなあ」

「うっ」

とりあえず、兄の部屋に風見君を押しこめて、着替えを済ませて顔を洗い髪を整える。

好きな人に寝起き姿を見られるなんて。兄の部屋の扉に苛立たしく言葉を投げかけた。

「もう。他にやること幾らでもあるでしょうに。バイトするとか、運転免許取るとか、由佳を誘うとか。そだ！ 由佳の家に行ってきたよ。このすぐ近くだから」

「女の子の家に急に行けるわけ無いだろ」

今、女の子の家に急にやって来てるのは誰なんだあ！ 夕方はともかく朝からなんて全く聞いてないぞ。

女の子扱いしてくれて無いことは、確定的に明らかです…。ぐふう。ダイニングテーブルを見ると、5食1パックのインスタントラーメンがナイロン袋に入って置かれてある。

「ラーメン、風見君が持ってきたの？」

「ああ、後で昼飯に食べようで」

安くて美味しくて大好物だけど…女の子の家に持って行くものじゃないよう。

それから、いつものように勉強して。

昼には風見君がラーメンを作ってくれた。

冷蔵庫の野菜を使っていいと言うと、あり合わせの野菜が刻んで茹でられてたっぷり入っていた。

コタツに入って一緒に食べる。

何故こんなことをしてるんだろう。変な関係だなあ、と思う。

ラーメンをすする目の前の大好きな人は、私をきつと妹のように思ってるんだろう。

近いけど遠い、時間制限有りの関係。あと一週間だ。

「受験まであと一週間だなあ」

私が考えてたことと同じ声が聞こえる。
彼を見ると不思議な表情をしていて、表情の意味を読み取るうとし
たけれど結局分からず仕舞だった。

「ふう。美味しかったあ。ごちそうさまでした」

「おそまつさま。つか、こっちこそいつも悪いな。夕食頂いて」

「いいのいいの。賑やかで嬉しいしお世話になってるから。お茶淹
れ直してくるね」

茶葉を換えて、いつの間にかうちで風見君専用になっている湯呑に
玄米茶をこぼこぼと淹れた。

「屋上でさ、なんで泣いてたの？」

ふうふうとお茶を覚ましながら風見君から声をかけてくる。

沢木君に屋上に拉致された時のことが。

「あれはね、沢木君が相談に乗ってくれてたの。私が勝手に泣ちや
つて」

「何を相談してた？」

「……………」

「何で沢木なんだよ。泣くようなことを何であいつに言うんだ？
俺に相談すればいいじゃん」

そ、それは……。

優しい風見君が心配してくれてるのは分かる。でも風見君には言え

ないよー…。
いつになく不機嫌な表情を浮かべているのが見える。
風見君のこんな表情を見るのは始めてだ。

「今度はそうさせてもらうね。ありがとう」

言い繕っても不機嫌に曇った表情が直らない。
私は視線を湯呑に落として黙りこくってしまった。
話題をそらさなきゃ。

そういえば、沢木君が何かを風見君に言えって言ったような。
ドイツ語のおまじないだったかな。
確か彼が言ってた言葉は、ええと…

「イツヒ リーベ デイツヒ」

だった気がする。

「イツヒ リーベ デイツヒだ。うん」

風見君がきょとんとして目を大きく見開く。

「それ俺に言ってるの？」

「うん」

「意味分かってる？」

「知らない。何かのおまじないらしいんだけど、どんな意味がある
んだろうね」

「……………。おまじないじゃない。『君を愛してる』って意味のドイ
ツ語」

「！！ ゲホッ ゲフグエツホッ ゲホゲホ……………」

「大丈夫？」

お茶でむせた私の背中をなでてくれる。

「急に愛の告白されてビビった」

「ゲフ……し、しないわよ！ 風見君は由佳が好きなんだもの」

あの意地悪イケメンめえええええ。

何て事を言わすんだ！

よりによって愛してるとか…。

でも。

『簡単さ。好きです、って言えばいいんだ』

沢木君はそう言ってた。気持ちを伝えるって案外簡単なんだな。そう思った。

もちろん意味が分からなかったから言えたんだけど。

「…ちーちゃん、俺はさ」

「ん？」

「…いや、受験終わったら言うよ。寝よ寝よ。お昼寝タイム」

お茶をごくごくと飲み干して、私に背を見せる向きでコタツに寝転がる。

受験が終わったら。

受験が終わったら、ちゃんと気持ちを伝えてみようか？

今さら私に許されるのかな。

ゆっくりお茶を味わってから、私も静かにコタツに横たわった。

風見君の声で目が覚める。

ドアの向こうで電話をしているみたいだ。

「行かねえって。…ああ。家にも来るなよ」

昼寝前よりも増して不機嫌な声。

誰と話してるんだろう？

すぐに話は終わったようで、部屋に入ってきて私と目が合う。

「ごめん。声で目が覚めた？」

「今のは…」

「親父」

大きく息を吐いて、私の斜め左前の、いつものコタツの定位置に座り肘をつく。

壁の掛け時計を見上げながら、少し間を開けて口を開いた。

「今度仕事でこの近くに来るから食事しないかってさ。親父の新しい女と一緒に。行くわけねえ。」

「それはつらいね…」

一度、家族のことを何かほめかして言うのを聞いたことはあったけれど、ちゃんと聞いたことは無かった。

風見君にもそんな家庭の事情があったのか。

「ご両親は離婚されてるの？」

「ああ、1年前に」

「なら今はお母さんと一緒に暮らしてるんだね」

「…母さんはアルコール依存症で、年末から実家の長野の方で入院治療してる」

え…………。

アルコール依存症…。

思いもよらない言葉が出て来て驚いた。

アルコール依存症については薄い知識しかないが、家族の負担はかなりのものなはず。

「風見君、兄弟は？」

「俺は一人っ子」

「そんな…じゃあ一人で頑張ってきたの…？ 風見君は優等生で落ち着いてて…全然そんなふうに見えなくて…」

「母さんを守れなかった情けない優等生だよ」

そう言つて空笑いする様子に胸が苦しくなる。

「まさかそんな環境だったなんて…………知らなかった」

「ごめん、重いよな。変な話してすまん」

「そういう意味じゃないの。気づいてあげられなくてごめん…私…何を見てたんだ…………」

ずっと彼のことを見ていたつもりだったのに。

今までつらい環境で一人で頑張つてたなんて。

3年見て来たのに全く気付かなかった。

私は風見君の何を見ていたんだ。情けなさで涙がこみあげてくる。

「…顔洗ってくる」

急いで洗面所に駆け込み、声を出さないように泣いた。自分が学校で一番不幸じゃないかと思っていた時もあった。でも私の問題は過去に終わっていて、兄がずっと守ってくれて。何事も無く高校生活を送っていたときに、彼はとても大きな問題を背負って1日々々を乗り越えてたんだ。ばしゃばしゃと水を浴びて涙を洗い流してから部屋に戻った。

「携帯鳴ってたよ」

「ありがと」

「受験前に言う話じゃないよな。ほんとごめん。ちーちゃんも親のこと慣れたって言ってたけど、俺も慣れたし大丈夫だから。まあ、依存症には未だに慣れないけどね」

そう言っただけでまた無理に空笑いをする。

いじらしくて衝動的に抱きしめたくなるのを抑えて、携帯を開いた。

「由佳からのメール。シュークリーム作ったから持ってきてくれるって。ちよつとこつち来て」

「何？」

風見君を台所に連れていく。

「私、晩御飯の材料買いに出かけてくるから、由佳にミルクティー淹れてあげて二人で食べてね。ミルクティーは、牛乳と水は半々で熱して、火を止めてから茶葉を淹れて3分蒸らして。茶こしでカップに入れて、最後にシナモンパウダーをほんの少し入れるの。この缶が紅茶の茶葉で、こつちがシナモンパウダーね」

「えっえっ？ ちーちゃんもいなよ」

「行ってくるから頑張っただね。さっきのこと来て俄然応援したくな

「 っちゃった。 風見君は幸せにならなきゃ」

私にはこんなことしか出来ないけれど…風見君には幸せになって欲しい。心からそう思った。

入試前日の朝。

「お弁当、鞆に入れといたよ」

「ありがっちゃー」

眠そうに目をこすりながら兄が食卓につく。

納豆をご飯にかけてかき混ぜながら、真剣な表情で私を見てきた。

「急にそんな顔してどうかした？」

「……両方受かったらあっちの方に行くの？」

「うーん……、まだ決めて無い」

「こつちにしなよ。ちーちゃんがいなかったら、おにーちゃん心配しすぎて心労で倒れちゃうよ。いいの？ いいの？」

「うん、いいよ」

「……」

私の冗談に、叱られた犬のようにうなだれたフリをする。あっちとは京都の大学のことだ。

「何にせよ受かってからの話。ほらほら、早く食べないと電車間に合わないよ」

「伏見の爺ちゃんの良い人だけどき。俺に気を遣ってのことならやめるんだよ。俺は全く負担だとは思って無いし、卒業するまで側で見届けたいと思ってるし」

そう言うと、納豆ご飯を口にかきこみ始めた。

京都の伏見に住む祖父は私たち兄妹を以前から気にかけていて、親が離婚した時に私たちに一緒に暮さないか、と言ってくれたこともあった。

今の、大学で京都の方に来るならいつでも世話すると言ってくれている。

私と二人暮らすようになってから、全くと言っていいほど夜遊びもしなくなった兄を私から解放してあげたいという気持ちもあり、京都の大学も受けてみた。幸いこの県でも試験会場があり、近くで受験出来る。

何も家事が出来ない兄を一人にするのは心配だが、私がそうだったように必要に迫られると出来るようになるのではと思う。

どちらにせよ、合格してからの話だけだ…。

そして晩になって。。。

今日で風見君が家庭教師に来てくれる最後の日。

朝から家に来たのは自主登校初日だけで、後はいつもどおりの夕方から来てくれた。

二人きりで過ごす時間が多くても、結局何も起こらなかった。それで当たり前だし、良かったと思う。

最後の晚餐もつつがなく終わり、見送りの時間になる。

玄関ドアの前の風見君に、兄がお礼にと買ってきたプリンを差し出した。

「風見君、お世話になったね。これつままないものだけど御家族と食べてね」

「ありがとうございます。こちらこそ、連日夕食を頂いてありがとうございました」

「それは、こっちに言わなきゃ」

兄が私の肩をぽんぽんと叩く。

「ありがとな」

「ううん。作る量が増えるだけだし気にしないで」

「合格したら、風見君も一緒に小さなお祝いパーティーでもやるか。残念会になる可能性も大きいかなー。…いてえっ。ちーちゃんやめて、背中つねらないで」

「あはは…ほんと仲良いですね。しばらく実家の方に行くので参加出来ないんですが、帰ってきたら是非また夕食にでも呼んで頂けたら」

「そうかそうか。実家でゆっくりしておいでね」

アパートの外に見送りに行く。外は雪が少しはらはらと舞っていた。

「お母さん、良くなるといいね」

「うん。明日から長野に行ってくるよ。母さんとこれ食べるから」

プリンの入っている袋を持ちあげて目配せして見せる。

私も後ろ手に袋を持って来ていて、それを彼の自転車の前かごの中にそっと入れた。

「本当にありがとね。一生懸命やってくれて感謝してる。安いもので申し訳ないけど私からのお礼。良かったら使ってね」

「わわ。貰ってばかりで悪いな。結構大きい…これ何？」

「湯たんぽ。一晩中ぽかぽかして気持ちいいよ」

「へえー…さっそく今晚使ってみる、サンキユ。今度さ、またカラオケ行こう。俺の小倉圭メドレー聴かせてやるから」

「だーめ、行かない」
「ちえ」

苦笑しながら自転車にまたがる。

「じゃ行くよ。頑張つてな」

「ありがとう、風見君もね」

もう彼はここに来ることは無いかもしれないけど、この一か月足らずで3年間見てきたことよりずっと多くの風見君を知れて、それが無性に嬉しく思えた。

バレンタインの日、由佳の家に向かっていた。小春日和で気持ち良い。

風見君、由佳からチヨコ貰えなくて残念がっているだろうなあ。

そんなことを考えながら、慣れた道をいつもより時間をかけてのんびり歩く。

白いセダンが横を通り過ぎると、私の少し前で止まった。

後ろのドアが開いて、ウェーブのかかったブラウンの髪を揺らした長身があらわれる。

「やあ、イトコさん。おめでとうかい？」

「うん。沢木君も？」

いつもの自信たっぷりの笑顔付きで彼はうなずいた。

由佳の家まで乗せてくれることになり、後部座席に乗り込む。

高級車だけあってシートがすこぶる心地よい。

前を見ると、後頭部の髪が少し薄い温厚そうな中年男性が運転席にいます。

「こんにちは。お父さんですか？」

「いや、うちの運転手さんだよ」

沢木家専属の運転手?! お金持ちっていう噂は本当だったのか。

運転手さんが私に優しい横顔を見せて会釈してくれる。

程なくして、由佳の家の黒塗りの鋳物門扉の前に着いた。

夕方に迎えに参ります、と運転手さんが言葉を残し白いセダンは走り去って行った。

インターホンを押そうとして指が止まる。
… 思い出した。沢木君に騙されて風見君にとんでもないことを言っ
たんだった……。

「沢木君… おまじないじゃなかったのね！」

「あー、あれ？ まさか言っちゃったんだ。 風見なら意味知って
たんじゃない？ アハハハハハ」

キツと睨んでやるが、心底楽しそうな笑顔が返ってくる。

「今度はプロポーズの言葉を教えようか？ フフ、Heirate
n Side bite (ハイラートンズィービツテ) . . .
ていってねえ」

「言わないわよ！」

「でもさあ、言うのは簡単だったでしょ？ 日本語でもサクッと
つちやえばいいんだよ。卒業したらなかなか会えないんだし。今日
来るんでしょ。言っちゃえば？」

「風見君は実家の方にいるから来ないわ」

「あらま、残念だね」

卒業かあ。

卒業式は半月後だ。風見君は来れるのだろうか？ お母さんの調子
次第では、来れないのかもしれない。

「沢木君はどうなの？ 由佳とは進展した？」

「それがねえ、まんざらでは無いと思うんだけどね、なかなか難攻
不落で攻めきれなくて。のんびりいくさ」

いつもの楽しげな笑みは絶やさないとはいけれど、少しだけ困ったような

表情がうかがえる。

思惑どおりに行ってないのかな？ 不思議な印象のある透き通った琥珀の瞳。

この瞳も由佳には通用しないのか。

「由佳ちゃん、風見のことがさ、ちょっと気になってたみたいなんだよね」

その言葉に驚く。でも本当に驚いたのは後の言葉だった。

「……！ じゃあ風見君と付き合っの…?」

「そうじゃないみたい」

「……どして?」

「風見が告白取り消したんだと」

?!!

何故……。

何やってるんだ…風見君…。

「ほんとに？ 何故なの?!」

「さー？ 僕は知らないねえ」

…一体どうしたんだろう。

せっかく両想いになれるところまでいけそうなのに。考え直すように言わないと。

伝えた気持ちを取り消すのは良くないと思う。由佳が風見君のことを気になっていたなら尚更だ。

すぐ脇に二人乗りの大型バイクが停まった。乗っていた二人がへ

ルメットを取る。

後ろに乗っていたのは美穂で、運転していたのは染めた髪を綺麗にセツトした男性だった。多分、美穂の大学生の彼氏だ。

「千景^{ちかげ}、沢木、合格おめでとう！ 良かったね」

「ありがとう。ギリギリだったんだけど何とか受かったよ。こちら
は彼氏さん？」

「うん」

美穂にしては珍しくはにみながら彼氏さんを紹介してくれた。

ファッション誌からそのまま抜け出た様なお洒落で洗練された雰囲気。ぶっきらぼうだけど優しい印象を受ける。

「沢木、千景泣かしたんだって？」

「いやいや、イトコさん誤解だよねえ？」

「そうなの。酷いこと言われちゃって…」

にっこりと嘘を言ってやる。嘘のおまじないのお返しなのだ。

「ちよつ、イトコさんたら」

「沢木てめえ…」

沢木君が、怖い顔をした美穂の彼氏に詰め寄られたのであわてて否定した。

「ちーちゃんおめでとぉ〜〜〜！」

洋風の大きなお屋敷に入ると、由佳と由佳ママにお祝いされる。由

佳が抱きしめてくれた。

「僕も受かったよ、ハグは？」

「沢木君もついでにおめでとう。アンタにあげるハグは無いわ」

「じゃあ僕があげるよー」

沢木君に抱きつかれ、由佳がぎゃーと声を上げる。由佳ママがさも微笑ましいと言わんばかりにその様子を見ていた。

「まあ、かつこいい子ね〜」

「どおも。由佳さんとお付き合ひさせて頂いております、沢木智也です」

「ハア?!」

「まあまあまあ。未永く仲良くしてあげてね〜。ささ、みんなこっちに。腕によりをかけて作ったから遠慮なく食べて頂戴ね」

ポルシチやバターライス、サラダを頂く。とても手が込んでいて美味しい。

デザートには由佳の作ったチョコレートケーキを出してくれた。しっとりとして濃厚で、甘すぎずとても口当たりが良い。

「ちーちゃんは、お祖父ちゃんの家近くの京都の大学も受かったんだよね? どっちに行くのお?」

「今迷ってるところなの。しばらくゆっくり考えてみる」

「こっちに残りなよ〜。離れたら寂しいわ」

「こらこら由佳、それは千景が決めることだよ」

たしなめるように美穂が言う。

本当にどうしよう。

風見君のこと、兄のこと、由佳のこと、友達のこと。色んな事が頭

の中をぐるぐる駆け巡ってまだ決められなかった。

「ケーキごちそうさま 『将を射んと欲すれば先ず馬を射よ』
てことで、僕はお母様を攻略してくるねえ」

「アンタね…変なことするなら帰って！ なんでこんな奴家に呼んだのお私…」

食べ終わった食器を片手に台所に向かう沢木君を、由佳が追いかけて行く。

楽しいな沢木君と由佳ママ、困り果てた由佳の声。キッチンから人の喧騒が漏れてくる。

「ツンデレってやつか？」

「デレが見つからないわ」

美穂と彼氏さんが首をかしげて聞いていた。

風見君の携帯に電話するのは初めてで、ちょっと緊張する。
一週間ぶりに声が聞けるのは嬉しい。

『こんばんは。試験どうだった？』

「受かったよ。風見君のおかげだよ。本当にありがとうね」

『あー！良かった！おめでと。俺はちよつと手伝っただけさ。落ちてどう慰めようかずっと考えててさ、受かってて安心したよ』

「ばか」

『ハハ、ごめんごめん。湯たんぽ暖かくていいね。退院してからは母さんがずっと使ってた、よく眠れるって喜んでるよ』

「お母さん退院したんだ？」

『うん、3日前に退院して、今は伯父の別荘にお世話になってる。環境も良いしお酒も止めたがってるから今は落ち着いてるよ。ただ、家に戻ってからどうなるかまだ分からないけど』

お母さんの具合が安定してるのだろう、電話の向こうの声が嬉しそうに弾んでいる。

「あの、由佳への告白取り消したって聞いたんだけど…ほんと？」

『ああ……本当』

「何で！何でそんな早まったことしたのよ」

『俺なりに考えてのことだよ。あの告白が早まったたというか…』『そんなことないでしょ。由佳のこと3年好きだったんじゃない。』

今からでも遅くないよ、取り消したのを取り消さなきゃ」

『もう決めたことだから取り消したりしないよ。3年…3年もバレバレだったのか。確かに可愛いなとは思ってた。でも、違うなって』

思ったんだ。だから神社に一緒に行ったときに謝って取り消した」
「神社って…だいぶ前じゃない。何で言ってくれなかったの？ 相談してくれば良かったのに」

相談してくれば止めたのに。

今日、由佳だって風見君のことを気になってたって沢木君が言ってた。

両想いの良い関係になれたかもしれないのに。

『ごめん、言おうかなとは思ってたんだけど、家庭教師に行く口実なくなるだろ。だから言えなかった』

「……口実って？ タダ飯欲しかったとか？」

『タダ飯…。うん、そうだな。ちーちゃんと他愛ないお喋りしたり、お兄さんも一緒にあったかい夕食食べてさ、本当に楽しかった。家帰っても独りで、居場所があってどんなに救われてたか』

「……」
『要は、甘えてたんだ。…悪かった』

お互い長い沈黙が続く。

あれは…一緒に食事したいという私の下心有りの、家庭教師のお礼で。

風見君にとってそんな意味があったなんて。

お母さんと一緒ならもう来る必要ないだろうと思いつつも、「また来ていいよ」と私は返した。

いつでも甘えてくれていいよ、本当はこう言いたかったけれど照れで出来なかった。

「お兄ちゃん、私こっちの大学に決めたから。でも、私ももう大人

だから、遅く帰ったり友達のところ泊ってきたりしていいから。
遠慮しないでね」

「分かったけど……。急にどうしたの、さっき聞いた時はまだ考えるって言うてたじゃん？」

「だって…あんなこと言ったら行けないわ」
「ほえ？」

不思議そうにきょとんとする顔に背を向け、兄の部屋のドアを閉めた。

「卵粥作って来たよ」

「食べたく無い……」

白の家具で統一された可愛らしい部屋に、風邪をこじらせた由佳がふせっていた。

昨日今日と、昼間は由佳のご両親が仕事で側に居られないので、私が代わりに世話に来ている。

「こらこら。食べて体力つけないと熱下がらないよ。無理にでも食べてね」

「うん……」

「食べさせてあげるから、あーんして」

小さい口にほどよく冷ました粥を運ぶ。

昨日は熱にうなされて何も食べられなかったけれど、今日は体調が回復して、食欲が少しわいてきたみたいだ。

「ふふ」

「何笑ってるの？」

「ひな鳥に餌をあげてる気分だなんて」

「もう。私はピーピー鳴いて無いわよ」

二人で笑い合っていると、インターホンが鳴った。

「出てくる、ゆっくり食べてね」

「ありがとう」

リビングのモニターを見ると、例の楽しげで仕方ない男の笑顔が映っている。

由佳のお見舞いに来たのだろう。

「沢木君、こんにちは」

「やあ、イトコさん」

「すごい花束…」

鑄物の門扉の向こうで、沢木君は大きな花束を抱えていた。

20本はありそうなコーラルピンクのバラに、かすみ草が添えられている。可愛らしくて由佳にぴったりだ。

応接間に通すと、念のため由佳に部屋に上げていいか確認を取りに行く。

「由佳、沢木君がお見舞いに来てくれたよ。コーーんな大きな花束抱えてるの！通していいよね？」

「帰って貰って」

「え。でも…」

「会いたくないから。髪ほさばさだしパジャマだし…」

そういうことか。女の子だったらやっぱり自分が綺麗な時に会いたいものだ。

気になる異性には特に。

由佳も沢木君のことはまんざらじゃないのかな…？

「ごめん、今は会いたく無いって。熱もまだ下がって無いし、また風邪が治ったころに来てあげてくれる？」

沢木君の笑みが消えた。いや、一瞬消えた気がした。

刺すような鋭い表情が一瞬あったように見えたけれど……今はいつもの笑みが保たれていて私の見間違いかもされない。

私が小さな疑問を浮かべていると、沢木君が大接間を出て行くこととする。

「悪いね、僕は会いたいんだ」

「ちょ、ちよっと待って、沢木君！」

私の制止を無視して、沢木君が階段を上り由佳の部屋に入っていく。

「こんにちは、お姫様。お加減はいかがですか？」

まるで中世のナイトのように一礼をして、私がさっきまで座っていたベッド横の丸椅子に腰かけた。

「帰って、って伝えたでしょ」

「君の顔が見たくてね。ここ何日か会ってくれなくて、もう限界」

「帰ってよお」

「熱で赤らんだ顔も可愛いよ」

「……………」

沢木君の上半身がゆっくり前かがみになり…顔が由佳に近づいていく。
これじゃ顔と顔がぶつかっちゃう……。
ああ…これはキスしようとしてるんだ!!
さらに顔が赤くなった由佳が、そっと目をとじる。
見ちゃいけないと分かりつつも、身体が固まって動かなかった。
もう少しで触れ合うところで、沢木君が体を起こし振り向いた。

「イトコさん、申し訳ない。花を花瓶に活けてきてくれるかな？」
「あつ、う、うん。行ってくるね！」

応接間のローテーブルに花を活けた花瓶を置く。
さっきの続きをしてるだろうから、今はとても持っていけない。
ソファに腰をおろして前かがみに頬杖をついた。
はあ…。何て光景を見てしまったんだ。
あまりの急な出来事に現実味がわかない。ドラマのワンシーンのように思えてなおさらだ。

由佳と沢木君か……。風見君は悲しまないかな…。
一週間前の電話でああ言っていたけれど、好きな気持ち急が全部消えたりするだろうか。
私だったら絶対無理だ。

「帰って！」

由佳の大声が聞こえた。

「由佳！どうしたの！？ 大丈夫??？」

早足で由佳の部屋に駆け込んだ。

ベッドにいる由佳と丸椅子に座る笑顔の長身が見える。

一見、さっきと変わらない様子だけど何があったんだろう。

「何でもないの、心配させてごめんね」

「本当に?」

由佳が、うんと頷く。

「いやあ、まずいメール見られちゃって。ハハハ」

沢木君がこちらに携帯を差し出してきた。

近寄って受け取ると、今さっき来たメールがあるようでタイトルは

”会いたい”とある。

メールの内容は…

「『久しぶりにしたいからホテルで会わない?』って……これは…

…」

「セフレでしょ」

由佳が吐き捨てるように言った。

セフレ。馴染みの無い言葉だけど意味は知っている。

沢木君が否定しないのでそうなんだろう。

申し訳なさそうにしつつも笑みは絶やさないう沢木君。

こんな状況でもニコニコ笑える沢木君を、軽蔑しつつも関心してしまふ。

そもそも由佳にこんなメールを見せなければいいのに…。

あっけらかんと自分をさらけ出せる沢木君のなせる技なんだろうか。

「今年に入ってからのはどのセフレとも会ってないよ。君がいれば会う気は無いんだ」

「”どのセフレとも”か。複数いるのねえ」

「ハハ、由佳ちゃん鋭いねえ」

部屋に呑気な笑い声が漏れる。

「笑ってる場合じゃないでしょ、沢木君！ セフレは切るべきよ。でないと由佳と付き合うなんて許さない」

「解ってる」

うんうん、とうなずくジェスチャーをしてみせる。

それから由佳の艶やかな前髪を優しく撫で立ち上がった。

「ふう、君の言う通り会わずに帰っておくべきだったね。バチが当たったなあ。…じゃあ帰るよ、由佳ちゃんお大事に。イトコさん、由佳ちゃん頼むね」

ひらりと立ち上がり、状況にそぐわない満面の笑みを残して長身の美男子は帰って行った。

しばらくは由佳も私も何も言わず、沈黙のまま部屋に視線を泳がせていた。

ふと応接間に置いたままの沢木君からの花を思い出す。

一階から運び、由佳の寝ているベッド横にあるサイドテーブルの上

に置いた。

白を基調とした部屋に、コーラルピンクの薔薇が映えてとても美しい。

「花、綺麗だね」

「…うん」

「セフレは絶対良くないと思うけど……私、沢木君は悪い人じゃないと思う。自分にも他人にも正直で、あの人の言葉には嘘は無い気がするの」

「…そうね」

それからまたしばらく沈黙が続く。

これからの二人の仲がどうなるかは分からないけれど、由佳の幸せに繋がりますように。

心の中でそつと願う。

由佳が静かに目を閉じた。

眠りそうだと思いそつと部屋を後にしようとした時、無理やり絞り出すような声が聞こえた。

「…私…ね、ちーちゃんが思ってるような子じゃないの…」

「ん？ 急にどうしたの」

「私もね…、セフレみたいな人がいるの」

「へっ…？ 何を言い出すの。熱にうかされてるのね」

「ほんとなの。ごめんね、ちーちゃんが思ってるような清纯で可愛い女の子じゃ無くて」

予想だにしていなかったことに頭が混乱する。

可愛らしい由佳が…ありえない。

私にとっては由佳は漫画のヒロインのような存在で。セフレなんてそんな。

…でも由佳の潤んだ大きな瞳が、本当だと語っている。
そんな中、ひとつの不安が浮かんだ。

「まさか…風見君？」

返って来た否定の言葉に肩をなでおろす。

「風見君はね、元彼に雰囲気か似てたから気になっちゃったの。
でもそんな気持ちじゃ当たり前よね、結局向こうから断られちゃっ
た。自業自得よお」

「元彼に…そうだったの…」

「私って最低だわ。沢木君を攻める権利なんて全く無かったのに…。
私もセフレとお別れする。で、今度会ったら全部沢木君にも言うわ。
セフレのことも私の気持ちも全部」

「由佳……」

「聞いて私への気持ち冷めた時に、もうセフレ全員と別れてたら
ちよっとかわいそうねえ」

熱で赤くなつた頬を揺らして、弱弱しくけたけた笑った。

由佳の風邪が治まると、今度は私が風邪を引いてしまった。由佳の風邪が移ったのかもしれない。むせるように咳をすると、ひどく喉が痛んだ。

今日は日曜だし兄が側にいてくれれば心強いけれど、運が悪く今日から数日間出張らしい。

兄が出張なんて初めてだし、そもそも日曜出勤も初めてだ。少し疑問に思ったけれど、そういうこともあるのだろう。

部屋に兄が入って来て、サンドイッチとパックの牛乳、風邪薬を、ベッド横に移動させた回転イスの上に置いてくれる。

「すまん、卒業式までには帰ってくるからな。冷蔵庫にいっぱい食糧入れといたから、ちゃんと食べるんだぞ。インフルエンザや肺炎だったらいけないし、月曜日になったら医者に診て貰うこと。分かった？」

布団から半分出した頭で、こくと頷く。

兄がキャリーバックを持ってアパートを出た後、体を起こし無理やりサンドイッチを口に頼り込む。一切れ食べて薬を牛乳でお腹に押し流す。

「ふう……」

再びベッドに横になり静かな天井を見上げた。

「セフレかあ……………」

沢木君に何人もいれば、信じられないことに由佳にもいるという。セフレを作るのは、何か満たされないものがあるからだろうか。体…心もかもしれない。

私が風見君に対してそういう欲求があるのは否定できないけれど、それが叶わないからといってセフレを作ることには繋がらない。

難しい…。私には分からないや。

寝がえりをうつと、テレビの横に置いてあるカイロが目に入った。以前、風見君に貰ったカイロだ。

大学合格を伝える為に一週間ほど前に電話したのに、もう何週間も話していない感じがする。

もう一週間経てば卒業式。その時にはこっちに戻って来て会えるかもしれない。

卒業後はきつと疎遠になって行くんだと思う。それでいいと思うけれど、風見君も言ってたように甘えたいときには私のところに来て欲しい。片思いなんだから家庭教師の思い出だけで満足すべきなのに、少し仲良くなってたことで我がママが漏れ出てしまう。駄目だなあ。

ため息のあと、咳で背中を揺らしていると携帯が鳴った。

『やあ。ちよつと相談があるんだ。』

沢木君からのメール。きつと由佳とのことだろう。

風邪で寝込んでるから無理だと返信すると、見舞いを兼ねてここに来るといふ。

断りたいところだけれど、由佳との仲のこともあるので渋々了解してここの場所を伝えた。

30分後、沢木君が色んな果物の入った大きなバスケットを抱えて来た。

由佳は花で私は果物。花より団子か。私らしくて何だかおかしい。

「酷い風邪だね。布団に入ってるといいよ」

沢木君が長身の体を窮屈そうに折りたたんでコタツに入っている。

6畳の古いアパートの部屋で、見目麗しい青年がコタツに入っている座ってニコニコしているのは、何とも違和感のある光景だ。

「げほつげほつ、いいもの貰ったのにお茶も出さないでごめんね」
マスク越しに風邪で変化した声で謝る。

「いいよいいよ、将来のご親戚さんなんだし気兼ねなくー」
いつもの調子の沢木君に、顔がほころんだ。

「明日会って話すよ」

突然そう切り出された。由佳と会うんだろう。

「うまくいくといいね」

「応援してくれるんだ？ 意外だなあ」

自分でも不思議に思う。ただ直感で悪い人じゃないと感じるからだ
けれど。

「こないだのメール、わざと見せたんだよねえ」

長いまつげの下の、大きなブラウンの瞳をまっすぐこちらに向けて
話し出した。

「かなり遊んでたんだよね、僕。一晚の女の子もいれば、お互い楽
しむ為にセフレ関係の女の子もいてさ。それが生きる目的みたいな
生活してた。ケジメつけるいい機会だし、付き合う前に知って貰わ
ないとフェアじゃないと思ったから。何かの拍子でバレる可能性も
あるだろうしね。で、ちゃんと誠意を持ってお別れしましたとも。

親父に頭下げて金出して貰ったさ」

「お金……」

「お姉さま方に遊んで貰ってたワケで、気持ちは通い合わない仲だ
よ。それならお金で解決するのが一番」
うーん。そういうものなんだろうか。

「いくら使ったと思う？ 合計一千万だよ、一千万。もうね、当分
親父に頭が上がらないよ」

「い………いっせんまん……げほげほつ」

数が多いのか、一人への額が大きいのか。とにかく信じられない合
計金額に変わりは無い。

「これで清廉潔白、品行方正、青天白日！　もう俺がふられる理由がないってわけ」

「そうかしら」

「いくともさ。何たって僕だからねー」

沢木君の表情が少し曇る。

「ウソ。正直、自信無くなって来たんだよね」

「……どして？」

「どうしてだろう」

表情がまた変わり…冷たさや苛立たしさ垣間見えるような不思議な表情になった。

由佳のお見舞いに来てくれた際に、会うのを断った時の表情だ。あの時見たのは間違いなかったんだ。

玄関のベルが鳴って、パツとまたにこやかな沢木君に戻る。

「お、援軍が来た」

きつと由佳を呼んでくれたんだ。病み上がりで申し訳ないものの素直に嬉しい。

「由佳ちゃんじゃないよ。か、ぎ、み、く、ん　フフフフ」

「へ？　風見君は長野にいるんじゃない？」

「んー？　それは知らない。電話したらすぐ行くって言ってたよ。

こんなに早いとはね、話す時間無いや」

風見君、こっちに帰って来てたのか。いや、それどころか今玄関先にいるんだ。あわわわわ…

「聞いたよ。由佳ちゃんとお近づきになる手伝いをする換わりに、家庭教師してもらってたんだって？　で、夜は一緒に夕食食べて餌付け？　やるねえ。策士だねえ。ああいう生真面目にはそうやって近づくのが一番ですなあ？」

…っう…風見君余計なことを。

「さて、風見と入れ替わるとしますか。ひとつアドバイス！ 落とす時は目を潤ませて『寒いので…温めて』こうだね！」

「そっ、そんなことより相談はもういいの？」

「不安は自分で見つめ直してみるよ」
相談ってそのことだったんだ。

この世の中の事象がおかしくてたまらなそうな人にも不安が存在するのよ、私には思いもよらないことだった。

沢木君と入れ替わりに風見君が部屋に入ってくる前に、テレビ横に置いてある以前風見君に貰ったカイロを枕の下に急いで隠した。

3週間ぶりに見る風見君は、表情も柔らかくなったように見えた。真つ黒なストレートの髪もわずかに伸びて少し印象が違っている。

「うわぁ この果物すげえ」

「それ沢木君が持ってきてくれて…げほげほ…」

大丈夫？と、側に来て背中をさすりながらスーパリーの袋を見せて申し訳そうにする。

「すまん…俺 持ってきたのラーメンだ。あ、でも今日のは生麺タイプだから」

得意げに言うのがおかしくて吹き出してしまふ。

それから、兄の布団を干して貰ったりストーブの給油をして貰ったり、お昼には卵をとじたラーメンを作ってくれた。一緒に食べながら、一昨日長野からこっちに帰ってきたことや、お母さんと一緒に断酒の為の自助会に参加しようと思っっていること、依存症と共に併発している鬱も快方に向かっていることなど、色んな話を話してくれた。

「風見君はラーメン好きなんだね」

「俺は麺とスープとネギが好きでさ、それらを一緒になおかつ一番美味しく食べられるのがラーメンだと思うんだ」

「げほっ……うどんやお蕎麦じゃ駄目なの？」

「ああうどんと蕎麦も好きだよ。和風だしのスープもいいよな。美味い老舗の店知ってるから今度…ん」

風見君の携帯が鳴った。受け取ったメールを見て呆れる様な表情をした後、ニヤリ笑いをしながらメールを返信している。

「風見君、悪い顔してる…」

「親父が女に振られたんだってさ。おめでとう、って返してやった。いちいちメールしてくるなっていつも言ってるのに。どーせあいつのことだから、すぐに新しい女作るんだろっし」
「ちよくちよく連絡くれるなんて仲良いんだね」
「どこが！」
むすつとした子供の様な顔をする。風見君は毛嫌いしてるようだけれど、風見君のお父さんの方は繋がりを持つようとしてるように思える。でも内容的に喜べないのも無理もないなあ。

夕方になって帰るように促したが、兄が帰るまでここにいると言う。
「お兄ちゃんはお出張中で今日は帰らないの」

「んー。じゃあ8時になったら帰る」

「お母さん大丈夫？ 早く帰ってあげた方がいいよ」

「連絡入れるし大丈夫さ。タオル替えるね」

寝ている私のおでこに乗っているタオルを、冷水に浸して絞りなおしてくれる。

「熱下がらないな……」

心配そうな顔で覗き込んでくる。風見君は本当に優しい。優しすぎると思う。

ただの友達の私にここまでしてくれる。

不意に両親の姿が脳裏に浮かんだ。私が熱を出して寝込んだ時、両親は……

「私のお父さんとお母さんはね、私が熱を出しても見向きもしてくれなかったよ」

「見向きもしない？」

「うん。興味が無いっていうか、どうでもいいみたいなの？」

風見君が不思議そうに首を傾げる。

「お洒落で活発で社交的でバリバリ働いて。素敵な両親だったの。カッコいいお父さんと美人のお母さん。私の自慢だった。ただね、

子供に全然興味が無かったの。泣きわめいて寂しいと訴えても耳に入れてくれなかった」

声を荒げて、両親の顔色一つ変えられない自分が情けなかった。

「家に居ないことが多くなって、それぞれ別の住処を持つようになって…帰ってこなくなった」

ベッドの傍らに長い脚を折りたたんで座る風見君を見ると、困ったような沈鬱な表情をしていた。言うべきじゃなかったと気づく。また彼の優しさに甘えてしまった。

「ごめんね。重い話しちゃって」

「…いいさ」

「風見君はやさしいね。いつもお世話になってばかりでありがとう」「世話になったのは俺もだし。そうだなあ、また手伝ってくれればいいよ」

「手伝う？」

「由佳さんとの仲を取り持とうとしてくれたことあったろ。あんな風にまた手伝って貰いたいんだ」

「げほっ…風見君もしかして…もう新しい好きな人が出来たの?!」
「気恥ずかしそうに笑ってうなずく。いくら何でも早すぎるよ風見君…。」

由佳の次にまた誰かを好きになることは当然あるだろうし、かすかな覚悟はしていたけどまさかこんな早いなんて。

「風見君気が多いよ。ちょっと幻滅」

「っ…」

シヨックはあるがやっぱり風見君には幸せになって欲しい。そういう想いも好きなのと同じくらいあるのを自分の中に確かに感じる。

「分かった、手伝うよ。私で力になれるか分からないけどね」

「サンキュ」

「で、誰なの？ その好きな人は。同じ学校の人？」

「まだ内緒。卒業式に言うって決めてるから」

「変なの。今言えばいいのに」

風見君は何も答えずにこたつに入りテレビを見出した。

私もベッドで横たわってテレビに見入る。今日は学校一の美青年沢木君と、ずつと好きだった風見君がお見舞いに来てくれた。元々は由佳のおかげとはいえ、私には本当にもつたいないなあ、と思う。

風見君の新しい好きな人はどんな子なんだろう。由佳と似た様な子なんだろうか。卒業式が終わると疎遠になると思っていたのに、こんな繋がりが卒業式後も続くことになるとは。

そんなことを考えていると、テレビのお菓子のCMであるものを思い出した。ベッドから出てよろよろと台所に向かう。冷蔵庫の一番上の奥に入れていた濃い紺色のナイロンの包みを持ってくる。

「げほっ……はいこれ、遅くなったけど義理チョコ」

義理チョコではない。が、義理チョコでないといけないのだ。それでも渡せることがすごく嬉しい。精一杯笑顔を作って手渡した。

「おー、ありがとな」

チョコを渡せた充実感の後、寒気と体の震えがどつと来た。まだ熱は強く体を蝕んでいるようだ。

「ごめん、少し寝るね……。冷蔵庫のお弁当、勝手に食べていいからね」

冷蔵庫には兄が買ってきたコンビニ弁当が食べきれないほど入っている。

「ああ、おやすみ」

ベッドに戻ると、程なく眠りに落ちた。

どれだけ寝たのだろう。目を覚ますと、とてもとても温かく、例えようもない心地よさを感じた。

布団だけじゃ無い。何か大きな温かいものに密着している。

…これは…まさか……。

どうやら腕らしきものがすっぽりと私の体を包んでいた。

顔を上げると、すうすうと穏やかに寝息を立てる風見君が、カーテ

ンの間から漏れる柔らかい朝日に照らされているのが見える。

「か、か、か、か、か、か……」

風見君が何で一緒に寝てるんだ……。

自分の服を確認する。服はちゃんと着ている。昨日のままだ。

「んー……。ちいちゃん……はよ……」

「か……かざみくん……。げほっげほっ」

咳が治まるまで私の背中をなでてから、自分のおでこを私のおでこにくつつける。数秒そうしてじっとした後、優しく笑いかけてきた。

「はは……顔真っ赤。だけど熱は随分下がった」

また大きな腕で私の体を引きよせる。

「良かった。昨日の夜、熱が上がって大変だったんだよ」

安堵したのか、ほうと大きな息が私の頭にふりかかった。

温かくて本当に心地良い。吸い込まれるような魅力的な心地良さ。

ずっところしていたいと思ってしまう。

……。だ、駄目だ流されちゃ！

「風見君！こんなことしちゃ駄目でしょ！ ばかばか！ 何てことするの！」

「体冷えるから。ほら、中に入って」

起こした体をまた再度引き寄せられる。

「暖かい。へへ……人間湯たんぼ」

「湯たんぼ替わりにしないでしょう！」

「ちよつとは安心する？」

「……？」

「昨日うなされてたから。こつやったら安心したのか静かに寝たんだ」

そつだったんだ。熱にうかされていたのだろう。昨日、両親のことを思い出してしまったのもあるのかもしれない。

「役得、役得。へへへ。昼まで寝させて……おやすみ」

「……ばか」

好きでもない人にここまでしちゃ駄目だよ……風見君のばか。

店に入ると、絹のようなサラサラとした髪が店の照明に照らされていて、僕と待ち合わせている彼女だと分かる。淡いピンクのセーターに、ベージュのチエツクのスカートを履いている彼女の向かいに腰を下ろした。ショートケーキを食べていたようだ。

「由佳ちゃん、君はいつでも甘いもの食べてるねえ」

「研究よ、研究」

「ほー」

「お菓子作りの参考にする為よ。甘いものが大好きってわけじゃないからね」

それにしては何とも美味しそうに食べている。結局、彼女は僕の前で3個のケーキを平らげた。

店を出ると、店に入る前より外気がさらに冷たくなっていた。

「ほら」

手を差し出すも、軽く首を振って拒否される。仕方なくコートのポケットに手を入れ、小柄な彼女がついてこれるよう、ゆっくりと歩道を歩き出した。

「どこに行くの？」

後ろから不安そうな、か細い声がかかった。

「すぐその僕のマンション。あ、借りてるのは父親だけだね」

「やり部屋ってわけねえ」

「ハハハ、すごい言葉知ってるね。まあ、否定はしないよ。元々は僕がギターやるから、防音設備のある練習場所として借りたのがきっかけなんだ。けどもう引き払おうと思ってる。大林の家に近いからね」

彼女の歩みが止まる。振り向くと彼女の青白い顔が見えた。僕を見

て表情がさらに凍りつく。僕は今とても険しい顔つきをしているのかもしれない。僕の悪い癖。欲しい物がどうにもならない時に、そのようになるによく母に知らされた。そのまま僕のマンションまで二人は無言だった。

清潔で整然としたリビングに彼女を案内する。ハウスキーパーが週に一度掃除をしに来るのもあるが、僕自身が掃除好きで整理整頓しないと気が済まない性格なのも大きい。

家具はダークブラウンで統一されていて、その他小物を含めシックな雰囲気をもし出すようコーディネートしている。

彼女をソファアームに座るよう促すと、僕は台所で彼女が好きらしい紅茶を淹れた。

「はい、どうぞ」
「ありがとう。……ちーちゃんが淹れてくれた紅茶の方が美味しいな」

「へーえ、今度イトコさんに淹れ方教えてもらうか」

僕もゆつくりと紅茶を口に含む。二人とも何も話さず、掛け時計の秒針の音が部屋にカチカチを響く。そんな時間がしばらく続いてから、彼女がごちそうさま、とカップを置き意を決したように話した。

「大林先生の事、今日言おうと思ってたの。…ほんとよ。隠しててごめんなさい」

「別に謝ることじゃないよ。隠すも隠さないも、誰と会うかも君の勝手さ」

「そ…それはそうだけど…」

「……まだ会ってるの？」

「ううん、もうお別れを言ってきたわ」

「ふうん」

内心ほつとする。別れていなければ、彼を社会的に追い詰めたかもしれない。

「夏に初めて付き合ってた人に振られて……ショックでショックで……泣きながら学校から帰ってたことがあったの。その時に先生に会って。…それがきっかけで度々会うようになって、寂しさを埋めて貰ってたの」

「好きだったの？」

「好きだったけど……恋愛感情は無かったと思う」

「へーえ。恋愛感情も無いのに振られた寂しさに擦り寄って、で、俺があらわれたらポイ捨てか」

「……………」

「風見だって、元彼と似てたから気になった。だから君から振らなかつた。最低だね」

「……………そうよ。私は最低の女よ」

彼女の目がうるむ。それでも目はそらさずじっとこちらを見つめていた。

「僕も似たようなもんだよ」

ソファーから腰を上げ窓辺に足を進める。壁に体重を預けながら、窓の下を見下ろした。

「この下に、君と大林が二人で歩いてるのを見てからさ。気になつて仕方なかつた。一度じゃない。何度も何度も二人で通つた。見るたびに他愛のないことと自分に言い聞かせて必死に忘れようとしたよ。でも無理だった。むしろ余計に気になるばかりだった。いくら女を連れ込んでも、いくら女を抱いても、ずっと由佳ちゃんのことばかり考えてたよ」

「何故私なの……見てたなら嫌ってくれればいいのに」

「だなあ。嫌いになればどんなに良かったか。ねえ」

最後に冗談めかして言ってみせると、少し安心したように彼女も微

笑んだ。すうと息が吐かれる。そして、あのね…とゆっくり言葉が切り出された。

「沢木くんはとても素敵の人だと思うわ。私はあなたを好きなんだと思う。風見くんよりも。でも自分なりにけじめをつけたいから、今は誰とも付き合いません。好きになっけてくれて、本当にありがとうね」

真摯にじつとこちらを見つめながら一言一言気持ちを込めるよう語られた。彼女なりの精一杯の誠意がこめられていたように思える。彼女が断ることは薄々分かっていて。予測していた答えだった。

でもずつと心にこもっていた不安が晴れてるのを感じる。答えにそぐわない笑みが漏れた。

「嬉しいよ」

理解出来ないんだろう、彼女が僕を見て不思議そうに首をかしげる。リスのように愛らしい仕草に見えた。

「これで本当のスタートラインに立てたと思わない？」

「……？」

「嬉しいんだ。君と本音で話せてさ。僕はそう思うよ」

沢木くんがコタツに入って紅茶を飲んでいる。

タイミングが悪いとかで、結局由佳に振られてしまったらしい。けれど、昨日や以前見かけた怖い雰囲気は微塵も感じられない。どこか清々しいような、落ち着いた穏やかな笑みを浮かべていた。

「ん…。確かにイトコさんの淹れる紅茶は美味しいね。レシピ書いていてくれる？」

「いいけど」

レシピを書く間、コタツの向かいで沢木くんが卒業旅行がカラオケか…とぶつぶつ楽しそうに呟いている。

「書いたよ。友達との予定でも考えてるの？」

「うん、由佳ちゃんとの。何に誘おうかねえ」

「……えっ？ 振られたんでしょ?!」

「確かに振られたけど。振られても諦めるわけないじゃん。僕だよ、僕」

ポンと胸に手を当てて、得意げに言う。いくら沢木くんでも振られたら諦めないとストーカーだよ、と喉から出かかりそうになるのを必死にこらえた。

「えと…もうすぐ卒業だし…諦めることも大事じゃないのかな？」

「ああ、卒業だけ大丈夫。君っていう接点があるからさ、イトコさん。そうだ、ちーちゃんって呼ばせてもらっね。由佳ちゃんとの大事な接点、仲の良いイトコのちーちゃんが僕のキューピットってわけ!」

「……は？」

「君と仲良くすれば由佳ちゃんとも繋がりが出来るってことさ。これからもよろしくね。ちーちゃん。ンフフフ」

「……お断りします」

私の返答を聞かないや、沢木くんは肩をふるわせて笑い出した。

「アハハハ。そう言うだろうと思ったよ。俺も風見のこと君に協力するからさ、持ちつ持たれつでどう？ 昨日も僕のおかげなんだし。そういえば、昨日何か進展あった？ お見舞いシチュエーションっておいしいよねえ」

「べ、べ、別に何も。た、ただお見舞いに来てくれただけだし。それに私はもうきっぱり諦めるんだから！ 勝手に連絡して呼んだりしないだね」

「目が泳いでる。君は分かりやすいねえ。フフフッ」

必死に否定していると、玄関のベルが鳴り扉が開く音がする。続いて、こんにちはー、と可愛らしい挨拶が聞こえた。

「ちーちゃーん。…げっ。沢木君がなんでここにいるのよ!」

「やあ由佳ちゃん。さつきぶり。　ちーちゃんのお見舞いに来てるんだよ。風邪引いてるらしいよ」

「まつ！　水くさい！　いつも心配事は言わないんだから！　私の風邪移ったんでしょお？　言ってくればいいのに」

「熱も下がったしもう平気だよ。あ、そうだ。お弁当余って困ってるの。もし良かったら食べてくれない？　コンビニのケーキもあるよ」

「食べる！」

台所でお弁当を電子レンジで温めている間、二人の騒がしい声が聞こえる。

「まさか、ちーちゃんに手を出そうとしてるんじゃないでしょうねえ？」

「心外だなあ。俺は由佳ちゃん一筋だよ。ほら見てこの目。純粹できらつきらしてるでしょ」

「全然信じられない！　あんた胡散臭すぎるのよお、もう！」

今まで通り。まるでさつき振った、振られた者同士とは思えない。何より由佳が楽しそうだ。

その後は、ささやかで賑やかなコンビニ弁当のパーティになった。

やわらかい陽をを浴びながら、ベランダに兄の布団を干す。
風邪はすっかり治った。さつき兄から連絡があり、もうすぐ帰って
くるという。

まだまだ寒いけれど、春の兆しが感じられるかすかな陽気を、しば
しベランダで楽しんでいた。

下に見える道路で自転車が止まる。風見くんがこちらに手を振って
いた。

「あんなことして！ 私、まだ怒ってるんだからね」

「お茶貰うよ。あんなことって？ ……あああれか」

風見くんはまるで自分の家のように、冷蔵庫のお茶をグラスに入れ
て食卓に座り込んでいる。

「熱でうなされてるちーちゃん放って帰れないし、コタツで寝ると
寒いし、仕方がなかった。だろ？」

「仕方がなかったで済まされることじゃないわ」

私の言葉など意に介さない様子で、コクコクとお茶を飲む。

きっと、私の気持ちなど知るはずもないだろうし、風見くんにとっ
ては深い意味は無かったんだろ。

私にとっては夢心地だったけれど…付き合ってもないのにあんなこ
とをするのは絶対駄目だ。

「風見くんのスケベ、エロ親父」

「男はみんなスケベなんだよ」

「うわ、認めた！ 開き直った！」

「お昼に蕎麦でもおごるから。それでチャラな」

「私は蕎麦一杯の価値だつていうの？」

「えっ 違う？」

私が怒ると、風見くんが肩を揺らして笑う。私もつられて吹き出してしまった。

「…おとといさ、俺がここに泊まるから親父に…」

風見くんの表情が一変し、物憂げに背中を丸めてテーブルに肘を付く。

「親父に母さんの側にいてもらえるように頼んだんだよ。そしたら昨日も仕事帰りに泊まっていつて、今日も来るつもりらしいんだ…」

「お母さんは嫌がってないの？」

風見くんが頷く。お母さんは嫌がるどころか喜んでいられるらしい。それなら、何も悩むことはないと思うのだけど…

「母さんが嬉しそうなのはいいんだ。でも、また親父が離れたときに以前のように荒れるだろうからなあ」

頭を抱えるような仕草をする。指の間から見える伏し目がちの漆黒の瞳に迷いや戸惑いがこもっているように感じた。

「お母さん、まだお父さんが好きなんだね」

「ベタ惚れだよ。あんな女たらしのどこがいいんだか」

風見くんのお母さんが別れた今でもお父さんのことが好きなら、出来る限り会わせてあげてと言いたい。でもまたお父さんが離れて行ったとき同じような苦勞が風見くんに振りかかったらと思うと、私は何も言葉をかけることが出来なかった。

ほどなくして兄が帰ってきた。

「ちーちゃああん！ ただいま！！ 寂しかっただろー？ ごめんな。ほれほれ、お兄ちゃんの胸に飛び込むといいよ。さあ、遠慮無く！」

「キモイイイ。離して」

私から胸に飛び込むのではなく、向こうからぎゅうと抱きついてくる兄を振りほどいて突き飛ばした。

「あははは。こんにちは、お邪魔してます」

「いてて…お、風見くん。こんにちは！ 久しぶりだねー」

「お久しぶりです」

「そいや合格祝いパーティーでもやるかって言ってたね。卒業式の日によ佳ちゃんも呼んでやるかあ」

「いいですねえ」

ついに週末は卒業式だ。風見くんの制服の第2ボタンは無理でも…シャツの一番下のボタン辺りでも貰えたらなあ…。

「ちーちゃん、ちょっと来て」

自分の部屋に行った兄がこちらに手招きをしている。何だろう。兄は私が部屋に来るやいなや真剣な顔をこちらに向けた。

「母さんに会ってきたよ」

えっ……。

「爺ちゃんから連絡があつて、大阪にいる母さんに会ってきた。頭に腫瘍があつて入院してる」

思いも寄らないことに思考停止してしまう。出張じゃ無かったのか。兄から母親という言葉が聞けるとは。それに……会ってきた……入院……腫瘍……？

「3日後に摘出手術があるから、手術の前に会っておいでいきなりのことに言葉が出てこない。」

「ごめん。最初はちーちゃんには黙っておこうと思つてた。もう何年も会つてないしな。でも手術だから万一のこともあるかもしれない。俺もちよっと迷つて……どうすべきか確かめに会いに行つたんだ」
兄なりの優しさを感じた。私は兄妹間での親の話を極度に嫌う。拒絶してしまう。いつも兄なりに気を遣つてくれているのは分かつていた。

「母さん変わってたよ。新しい旦那さんも良い人だった。大丈夫だから。安心して行っておいで」

「……………」

「伏見の爺ちゃんの所に泊まればいいから。分かった？」

「……………私には関係ないよ。行かない」

「荷物まとめが大変でさ、ダンボール20個になっちゃったよ」
オーブンテラスのカフェに由佳、美穂と3人でお茶をしに来ていた。
美穂が卒業後に彼氏と同棲するらしい。

明日はお母さんの手術だ。朝、出勤前の兄にさんざん行くように言われたが、結局行かなかった。

さつきからマナーモードにした携帯が何度も振動している。きつと兄だろう。

「どれだけ持つていくつもりなのよお美穂ちゃんったら。お嫁に行くんじゃないんだから」

「あんたも沢木と暮らせばいいのに。あれはモテるから、放っておいてどこかの令嬢に取られても知らないよ」

「私はお菓子作りに専念するの！ それで離れていけばそれでいいわよお」

「パティシエになりたいなら、それこそあいつの家の人脈とお金を利用すればいいのよ。沢木商事の創業者一族なんだから」

「美穂ちゃんリアリストねえ。私は有名になりたいとかお金持ちになりたいんじゃないじゃなくて、お菓子作りの道を追求したいの！ 職人なのよー」

二人の会話が耳に入ってこない。店で焼かれた自家製パンをもぐもぐと口に含む。

きつと行かなくてもきつと無事に終わる…私が行っても迷惑なだけ…きつと無事に終わるはず。由佳が心配そうな顔をして覗き込んできた。

「ちーちゃん、どうしたのお？ 大丈夫？」
「う、うん」

ふと、目の前に風見くんの幻が見えた。大きい鞆を二つ抱えている幻。その幻がどんどん近づいてくる。私は大丈夫じゃないのかもしれない。幻が目の前までやってきた。

「見つけた！ 大阪行くぞ」

大阪行きの新幹線に乗っている。

隣の座席には風見君が座っていて、片膝をつけて眠っているようだ。

店に突然風見君がやってきて私も驚いたが、同じように由佳や美穂も驚いてちよつとした騒ぎになった。

そりゃそうだろう、大きな荷物を抱えて大阪に行くぞ、と現われたのだから。

私の兄に頼まれ、兄がまとめた私の荷物を持ってきたらしい。

おびただしい私の携帯電話の着信は、兄と風見君からのものだった。何故兄は風見君に頼んだのだろう。母方でなく父方の親戚にあたるが普通はイトコの由佳に頼むだろに…。

私の疑問をよそに、風見君は今から私が手術前の母に会いに大阪に行くことを二人に説明している。

納得したらしい由佳が、ニッコリといつもの柔らかい笑顔を向けた。

「分かったわあ。風見君、ちーちゃんをよろしくね！」

「ああ、任せてくれ」

そんな…本人を目の前にして勝手に任せられても。

「ちよ、ちよつと待ってよ！ 行くにしたって一人で行けるわ。風見君は来なくていいでしょ」

「意地っ張りのちーちゃんを放っておいたら、何年経っても行かないよ」

そつねえ、筋金入りよね、と由佳が苦笑しながらうなずいた。

「俺は病院までは必ず連れていく。お兄さんと約束したからさ。向こうでどうするかは自分で決めればいい」
そう言うと、この店自慢の自家製パンをまだ食べきっていない私の腕を掴み、なかば引きずるように駅へと歩き出した。

このお人よし…。

隣の座席で目をつむる風見君の横顔をキツとにらむ。

私は風見君の優しさが、何だか憎らしくなってきた。

風邪のとき朝まで一緒にいたり、しかもそれが同じ布団の中だったり、風見君の優しさは度が過ぎている。

私は風見君が好きなのだ。そんなことをされたらもつと気持ちが大きくなってしまふ。

もう一週間もしないうちに卒業式なのに、つらだけじゃないか。

このお節介男め。むー！と口をへの字にしてまたにらみ込んだ。

途端、急に目を開けた風見君と目が合った。怪訝な顔でこちらを覗き込んでくる。

「何？」

「別に…」きまりが悪くて通路の方を見やった。

「すごい顔だった。鬼がいたよ、鬼が」

なんだって、とまた風見君をにらむ。

「そう、その顔」

さもおかしそくに肩を揺らして笑う。

「ちーちゃんの気持ち考えずに無理に連れてきて悪いとは思っけど、万が一ってこともあるし、会っておくべきだと思っよ」

私の表情の意味を誤解したようで、諭すように説得するように語り

かけてくる。

うながされるまま新幹線に乗ったけれど、私はまだ会うかどうか決めきれない。

そもそも母にとって私は”迷惑”な存在だった。

手術前ならなおさら会わない方がいいんじゃないか、と思ってしま

う。

「親だからさ、そんなに深く考えなくていいと思うよ」

「…うん」

「もちろん、どうにもならないことも多いけどさ。俺もそうだし。

いいじゃん、親なんだから。会うくらい遠慮すること無いさ」

「親ってそういうものだったのかもしれない。小さい頃を思い出すような不思議な感覚がよぎった。

それから風見君はまた肘をつけて眠りにつく。私は端正な横顔ごしに、窓の外の景色をずっと見ていた。

新大阪で新幹線を降りて、電車とバスを乗り継いで。

坂を登った先に、母が入院している緑に囲まれたレンガ調の壁の大きな大学病院があった。

ここまで来ればもう会うしかない。兄もそのつもりでここまで連れてこさせたのだろう。

覚悟を決める。一階の広い待合室で風見君に待ってもらうことにした。

「行ってくるね」

「ほい。行ってきな」

背を向けた矢先、パシッと後ろから私のお尻がはたかれる。

「こ、こらぁ！ 風見君のスケベ！」

「ほらほら。行った行った」

笑顔で見送る風見君に一度深くうなずき、母のいる病室に向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2314/>

片思いのキューピット

2011年12月2日01時48分発行